

『大乘莊嚴經論』第 XI 章第 53-59 偈 —テキストと和訳—

上野隆平

はじめに

ここに『大乘莊嚴經論』(*Mahāyānasūtrālaṅkāra*)の一乗説に対する注釈文献のテキストと和訳を提示する。「諸法の探求の章」(Dharmaparyeṣṭyadhikāra、漢訳の「述求品」に相当する)と名づけられた同論の第 XI 章は全 78 偈より構成されるが、「一乗たること」ないし「乗は一つであること」(*ekayānatā*)の探求は、その中の第 53-59 偈にて行われている。

『莊嚴經論』の注釈文献として最も重要なものといえば、言うまでもなく世親『大乘莊嚴經論(釈⁽¹⁾)』(*Mahāyānasūtrālaṅkāra-bhāṣya*)であるが、その復注文献に当たる無性『大乘經莊嚴広注』(*Mahāyānasūtrālaṅkāra-tīkā*)や、安慧『莊嚴經論釈疏』(*Sūtrālaṅkāra-vṛtti-bhāṣya*)もまた、同論を読解する際は是非とも参照すべきものであり、これらの注釈文献を通して『莊嚴經論』の一乗説を読解することが本稿の目的である。

先行研究

当該箇所テキストと和訳については、現在までに以下のものが公表されている。これらの概要に関しては、上野 [2014] pp. 87-89 を参照されたい。同稿は松本 [2013] に対して疑義を呈するものであるが、その冒頭において、以下の先行研究に関しても、ごく簡単に紹介を行った。尚、このほかに思想研究の部類に属するものの中に、当該箇所のテキスト・和訳に触れるものも存在するが、分量の少ないものに関しては省略する。

(1) 一般に『大乘莊嚴經論』の本頌に対する世親の注釈をも含めて『大乘莊嚴經論』と呼ぶことが多い。厳密に言えば、世親釈を含む場合は『大乘莊嚴經論釈』というべきであるが、本稿の以下の用例も通例に従う。ただし、本頌と世親釈の区別を強調したいときは、「本頌」「偈頌」もしくは「世親釈」などの語を用いて、それが分かるように表記する。

XI.53-59	テキスト	和訳
世親釈 (梵)	舟橋 [2000]、長尾 [2007]、松本 [2013]	宇井 [1961]、松本 [1982b]、長尾 [2007]、松本 [2013]
世親釈 (蔵)	なし	なし
無性釈 (蔵)	なし	下川邊 [1986]、松本 [2013] (抄)
安慧釈 (蔵)	Hayashima [1979]	松本 [2013] (抄)

本稿は、以上のような先学の研究成果を踏まえた上で、世親釈の梵文校訂テキスト・和訳・蔵訳校訂テキスト、無性釈の蔵訳校訂テキスト・和訳、安慧釈の和訳・Hayashima [1979] に対する訂正案、及び XI.53-59 の梗概 (シノプシス) を提示するものである。

凡例

【略号】

- A** 武内他 [1995] 所収の A 本。
B 武内他 [1995] 所収の B 本。
C チョーネ版チベット大蔵経 (Tibetan Buddhist Resource Center)。
D デルゲ版チベット大蔵経 (東京大学印度哲学印度文学研究室編)。武内他 [1995] 所収の A 本。
F 舟橋 [2000] を見よ。
H Hayashima [1979] を見よ。
L^I Lévi [1907] を見よ。
L^{II} Lévi [1911] を見よ。
MSA/Bh *Mahāyānasūtrālamkāra/-bhāṣya.*
MSAṬ *Mahāyānasūtrālamkāra-ṭīkā.*
MS/Bh *Mahāyānasamgraha/-bhāṣya.*
MSU *Mahāyānasamgrahopanibandhana.*
N ナルトン版チベット大蔵経 (Tibetan Buddhist Resource Center)。
Nc Nepal-German Manuscript Preservation Project Ms .No.4-6; Bṛhatsūcīpatram II kramāṅkaḥ ca20.
N^I Nagao [1961] を見よ。
N^N 長尾 [2007] を見よ。
Ns Nepal-German Manuscript Preservation Project Ms .No.3-291; Bṛhatsūcīpatram II kramāṅkaḥ ṭṛ291.
om. omitted in.

P 北京版チベット大蔵経（鈴木学術財団影印版）。

S 下川邊 [1986] を見よ。

SAVBh *Sūtrāṃkāra-vṛtti-bhāṣya*.

【テキストの作成方針】

〈梵文テキスト〉

• L^I (pp. 68-70) を底本として、Ns (56b1-58a1)、Nc (46b3-47b6)、A (63b2-65a4)、B (67a9-69a7) の四写本を校合した（写本の略号は舟橋 [1985] に従う）。また L^{II} (pp. 124-127)、N^I (p. xv)、F (pp. 51-52)、N^N (pp. 113-123)、M (pp. 355-376) の訂正案を参照し、底本に訂正を加える場合は、それらの読みをも注記した。

• 写本の支持が得られない場合でも、子音重複の標準化、連声規則の適用、コンマないしダンダの挿入・削除を適宜行い、逐一注記しなかった。

〈蔵訳テキスト〉

• MSABh (C169b5-171a2, D174a5-176a2, N182a7-183b7, P188a6-189b7)、MSAṬ (C93b7-96a1, D93b6-96a1, N102a4-104a7, P104b1-106b7) に関しては、C・D・N・P の四版を底本とし、最良と思われる読みを採用した。

• MSABh (蔵) と、MSAṬ (蔵) が引用する MSABh の文言は、若干の例外を除いて、完全に一致するので、両論のテキストを作成する際は、相互に参照し、時に訂正の根拠とした。また MSAṬ に関しては、S (pp. 16-27) の注記をも参照し、異読を示す際は S の読みをも併記した。

• SAVBh (C196b6-202b7, D196a5-202b2, N217a7-224a7, P217a3-224a1) に関しては、既刊の H (pp. 46-66) を底本とした。ただし、常に C・D・N・P の四版の異読、及び M の訂正案をも参照し、底本と異なる読みを採用する場合は、稿末の「訂正案一覧」に列挙した。

• 諸版の支持が得られない場合でも、シェーの挿入・削除を適宜行い、逐一注記しなかった。

参考文献

Nagao, Gadjin

[1994] *An Index to Asaṅga's Mahāyāna-saṃgraha. Part One, Tibetan-Sanskrit-Chinese*, Tokyo: Japan, The International Institute for Buddhist Studies.

Schmithausen, Lambert

[1969] *Der Nirvāṇa-Abschnitt in der Viniścaya-saṃgrahaṇī der Yogācārabhūmiḥ*, Wien, Hermann Böhläau.

Hayashima, Osamu

[1979] *Chos yongs su tshol ba'i skabs or Dharmaparyeṣṭy adhikāra The XIth chapter of the Sūtrāṃkāravṛttibhāṣya, subcommentary on the Mahāyāna-sūtrāṃkāra Part III*, 『長崎大学教育学部人文科学研究報告』28.

Griffiths, Paul J., Hakamaya, Noriaki, Keenan, John P. and Swanson, Paul L.

[1989] *The Realm of Awakening, A translation and study of the tenth chapter of Asaṅga's Mahāyāna-saṃgraha*, New York, Oxford University Press.

Lévi, Sylvain

[1907] *Mahāyāna-sūtrāṃkāra, exposé de la doctrine du Grand Véhicule selon le système Yogācāra*, tome I, Paris: Librairie Ancienne Honoré Champion (repr. Kyoto: Rinsen Book Co., 1983).

[1911] *Mahāyāna-sūtrāṃkāra, exposé de la doctrine du Grand Véhicule selon le système Yogācāra*, tome II, Paris: Librairie Ancienne Honoré Champion (repr. Kyoto: Rinsen Book Co., 1983).

宇井伯寿

[1961] 『大乘莊嚴經論研究』岩波書店。

上野隆平

[2013] 『『大乘莊嚴經論』「求法品」の一乗 (ekayānatā) 説—第 XI 章第 54 偈の読解と位置づけに関して—』『印度学仏教学研究』62-1。

[2014] 『『大乘莊嚴經論』第 XI 章第 53-59 偈の理解をめぐって—松本史朗博士の御論考に対する 3 つの疑義—』『岐阜聖徳学園大学仏教文化研究所紀要』14。

下川邊季由

[1986] 「無性造『大乘經莊嚴広註』和訳(3)—求法品第 53 頌~59 頌—」『大崎学報』141。

白館戒雲 (ツルティム・ケサン)

[1993] 「一乗思想と如来蔵思想」『関西大学東西学術研究所紀要』26。

高崎直道

[1979] 『仏典講座 17 楞伽經』大蔵出版。

武内紹晃、神子上恵生、早島理、清水公庸、毛利俊英、藤田祥道、乗山悟

[1995] 『龍谷大学佛教文化研究所編、龍谷大学善本叢書 14 梵文大乘莊嚴經論写本』法蔵館。

寺本婉雅

[1928/repr.1974] 『ターラナータ印度佛教史』国書刊行会。

長尾雅人

[2007] 『『大乘莊嚴經論』和訳と註解—長尾雅人研究ノート—(2)』長尾文庫。

袴谷憲昭

[1981] 「三乗説の一典拠—*Akṣarāṣi-sūtra* と *Bahudhātuka-sūtra*—」『古田紹欽博士古稀記念論集・仏教の歴史的展開に見る諸形態』創文社。

舟橋尚哉

[2000] 『『大乘莊嚴經論』の諸問題並びに第 11 章求法品のテキスト校訂』『大谷大学研究年報』52。

松本史朗

[1982a] 「Madhyamakāloka の一乗思想 —一乗思想の研究(I)—」『曹洞宗研究員研究生研究紀要』14。

[1982b] 「唯識派の一乗思想 —一乗思想の研究(II)—」『駒沢大学仏教学部論集』13。

[2013] 「瑜伽行派の一乗思想」『仏教思想論・下』大蔵出版。

山部能宣

[1987] 「初期瑜伽行派に於ける界の思想について —Akṣarāśi-sūtra をめぐって—」『待兼山論叢』21。

MSABh 梵文テキスト・和訳

ekayānatāparyeṣṭau sapta ślokaḥ /

dharmanairātmyamuktīnām tulyatvāt gotrabhedataḥ /
dvyāśayāpteś ca nirmāṇāt paryantād ekayānatā // XI.53 //

dharmatulyatvād ekayānatā śrāvakādīnām dharmadhātor abhinnatvāt, yātavyaṃ yānam iti kṛtvā / nairātmyasya tulyatvād ekayānatā śrāvakādīnām ātmābhāvatāsāmānyāt, yātā yānam iti kṛtvā / vimuktitulyatvād ekayānatā, yātir yānam⁽²⁾ iti kṛtvā / gotrabhedād ekayānatā aniyataśrāvakagotrāṇām mahāyānena niryāṇād, yānti tena yānam iti kṛtvā / dvyāśayāpter ekayānatā, buddhānām ca sarvasattveṣv ātmāśayaprāpteḥ, śrāvakāṇām ca tadgotranīyatānām pūrvam bodhisambhāracarītānām ātmani⁽³⁾ buddhāśayaprāpter⁽⁴⁾ abhinnaśaṃtānād dhimokṣalābhato buddhānubhāvena tathāgatānugrahaviśeṣapradeśalābhāya / ity ekatvāśayalābhenaikatvād buddhatacchrāvakāṇām ekayānatā / nirmāṇād ekayānatā yathoktam anekāśatakrīto 'haṃ śrāvakayānena parinirvṛta iti vineyānām arthe tathā nirmāṇasaṅdarśanāt / paryantād apy ekayānatā, yataḥ pareṇa yātavyaṃ nāsti tad yānam iti kṛtvā / buddhatvam ekayānam, evaṃ tatra tatra sūtre tena tenābhiprāyeṇaikayānatā⁽⁵⁾ veditavyā, na tu yānatrayaṃ nāsti /

一乗たること〔ないし乗は一つであること〕(ekayānatā) の探究について七偈がある。

- (1) 法と (2) 無我と (3) 解脱とが等しいことにより、(4) 種姓に別があることにより、(5) 二つの意樂を得ることにより、(6) 変化〔身〕により、(7) 究竟により、一乗たることがある⁽⁶⁾。

(2) *ekayānatā yātir yānam* Ns : *ekayānatā yāti yānam* B,L^I,F,N^N,M : *ekayānam* Nc,A.

(3) *caritānām ātmani* Ns,Nc,A,B,L^{II},N^I,F,N^N,M : *caritād anātmani* L^I.

(4) *buddhā* Ns,Nc,A,B,L^{II},N^I,F,N^N,M : *baddhā* L^I.

(5) *tenā* Ns,Nc,A,B,L^{II},N^I,F,N^N,M : *tanā* L^I.

(6) 当該の XI.53-54 は『撰大乘論』の X.32 に順序を逆にして引用されている(長尾 [1986] pp. 428-434 を参照)。

(1) 「法が等しいことにより、一乗たることがある」のは、声聞などにとって、法界には区別がないからである。〔ここでいう〕乗⁽⁷⁾ (yāna) は、行かれるべき〔対象〕(yātavya)〔の意味〕であるゆえに。(2) 「無我が等しいことにより、一乗たることがある」のは、声聞などにとって、我が存在しないことは同様だからである。〔ここでいう〕乗は、行く者 (yātṛ)〔の意味〕であるゆえに。(3) 「解脱が等しいことにより、一乗たることがある」。〔ここでいう〕乗は、行くこと (yāti)〔の意味〕であるゆえに。(4) 「種姓に別があることにより、一乗たることがある」のは、未だ決定していない声聞の種姓をもつ〔声聞の〕者たちが (aniyataśrāvakagotrāṇām)⁽⁸⁾、大乘によって出離するからである。〔ここでいう〕乗は、それによって〔人々が〕行く〔手段〕(yānti tena)〔の意味〕であるゆえに。(5) 「二つの意樂を得ることにより、一乗たることがある」のは、(5a)〔一つに〕諸仏は、すべての有情に対してわれであるとの意樂 (āśaya) を得るからである。(5b)〔二つに〕その種姓はすでに決定しているが、かつて菩提のための資糧を行じた声聞たちは、仏の威神力 (anubhāva) のおかげで、〔自らの身心の〕相続は〔諸仏と〕異なるところがないという信解を得ることによって、如来のすぐれた摂取 (anugraha) の一部だけでも得ようとして、自らに対して仏であるとの意樂を得るからである。このように〔部分的であっても〕同一の意樂を得ることにより、仏とその声聞は、同一であるゆえに一乗たることがある。(6) 「変化〔身〕により、一乗たることがある」のは、〔諸經典に〕「わたしは何百回にもわたり、声聞乗によって般涅槃した」と説かれているように、〔仏は〕所化の者たちのために、そのように変化〔身〕を示現〔し、声聞乗によって般涅槃〕するからである⁽⁹⁾。(7) 「究竟によって」もまた「一乗たることがある」。それより、さらに行かれるべき〔対象〕はない (yataḥ pareṇa yātavyam nāsti)、それが〔ここでいう〕乗〔の意味〕であるゆえに。仏たることが一乗なのである。以上のように、あれこれの經典に、あれこれの意趣 (abhiprāya) をもって一乗たることが〔説かれた〕と知るべきである⁽¹⁰⁾。しかしながら、三乗が存在しないわけは決してない。

kimarthaṃ punas tenābhiprāyeṇaikayānatā buddhair deśitā /

偈のみの引用であるが、それに対する世親・無性の注釈が残されている。尚、両釈の蔵訳校訂テキストと英訳は Griffiths et. al. [1989] pp. 364-366, pp. 232-239 に掲載されている。また真諦訳『撰大乘論 (世親) 釈』は、蔵訳や玄奘訳とは異なる特異な理解を示している。この点に関しては、上野 [2014] pp. 95-96, p. 103 を参照。

(7) 梵語の yāna は、√yā (行く) に由来する中性名詞であり、本来の意味は「行くこと」「道」である。これを「乗りもの」の意味で理解するようになったのは、『法華経』の影響によると思われる。本稿では、慣例に従って「乗」の語を使用するが、その本来の意味が「行くこと」「道」であることは注意を要する。

(8) aniyataśrāvakagotra を「未だ声聞の種姓に決定していない者」と訳すと、すでに菩薩の種姓に決定している者をも含意してしまうので、蔵訳 (nyam thos la sogs pa'i rigs su ma nges pa rnams) がこれを支持することは承知の上で、あえて「未だ決定していない声聞の種姓をもつ〔声聞の〕者」と訳した。意味は、これまで声聞の行を行ってきた者で、今も声聞乗の枠内に存在するが、未だ声聞の種姓を決定するには到っていない者、つまり XI.54 が述べる (4a) 「声聞の種姓をもち〔ながら〕未だ決定していない者」(śrāvakagotrā aniyatāḥ) であり、大乘に誘引すべき対象を指す。この点を少しでも和訳に反映すべく、〔 〕内に「声聞の」の語を補って「未だ決定していない声聞の種姓をもつ〔声聞の〕者」とした。

(9) 松本 [2013] pp. 266-270 は、偈・世親釈に見える三ヶ所の「変化〔身〕」(nirmāṇa) をすべて「涅槃」(nirvāṇa) に訂正すべきと主張するが、筆者は、その必要はないと考える。この点に関しては、上野 [2014] pp. 90-99 を参照。

(10) 当該の (1)~(7) は『中観光明』の前主張 (唯識派の見解を論じる部分) において、『法華経』等の一乗説に込められた「意趣」(dgongs pa, *abhiprāya) として提示されている (松本 [1982a] pp. 293-292 を参照)。

ākaraṣṇārtham ekeṣām anyasaṃdhāraṇāya ca /
deśitāniyatānāṃ hi saṃbuddhair ekayānatā // XI.54 //

ākaraṣṇārtham ekeṣām iti ye śrāvakagoṭrā aniyatāḥ / anyeṣāṃ ca saṃdhāraṇāya ye bodhisattvagoṭrā aniyatāḥ /

では、何のために、諸仏は〔あれこれの經典に〕あれこれの意趣をもって、乗は一つであることを説かれたのか。

実に、正等覚者たちは、或る者たちを誘引するために、また他の者たちを慰留するために、未だ決定していない者たちに対して、乗は一つであることを説かれたのである。

「或る者たちを誘引するために」とは、(4a)⁽¹¹⁾ 声聞の種姓をもち〔ながら〕未だ決定していない者たち (śrāvakagoṭrā aniyatāḥ) 〔を大乘に誘引するため〕であり、また「他の者たちを慰留するために」とは、(4b) 菩薩の種姓をもち〔ながら〕未だ決定していない者たち (bodhisattvagoṭrā aniyatāḥ) 〔を大乘に慰留するため〕である⁽¹²⁾。

śrāvako 'niyato dvedhā drṣṭādrṣṭārthayānataḥ /
drṣṭārtho vītarāgaś cāvītarāgo 'py asau mṛduḥ // XI.55 //

śrāvakaḥ punar aniyato dvididho veditavyaḥ / drṣṭārthayānaś ca yo drṣṭasatyo mahāyānena niryāti /
adrṣṭārthayānaś ca yo na drṣṭasatyo mahāyānena niryāti / drṣṭārthaḥ punar vītarāgaś cāvītarāgaś
ca kāmebhyaḥ / asau ca mṛdur dhandhagatikō veditavyaḥ / yo drṣṭārtho dvididha uktaḥ /

未だ〔声聞の種姓に〕決定していない声聞は、(4a.1) すでに真実を見て、行く者と、(4a.2) 未だ真実を見ないで、行く者により⁽¹³⁾、二種である。〔その中、〕すでに真実を見た者は、(4a.1.1) 離貪した者と、(4a.1.2) 離貪していない者と〔の二種〕であり、〔いずれの〕かれもまた鈍〔根〕である。

(11) 以下に使用する (4a)(4b)(4a.1)(4a.2)(4a.1.1)(4a.1.2) の符号は、XI.54 以下の議論は XI.53(4) の内容を敷衍したものであるという筆者の理解による。詳細は、本稿所載の XI.53-59 の梗概 (シノプシス) を参照されたい。

(12) 松本 [2013] pp. 310-312 は、大乘に誘引すべき有情を「不定種姓の菩薩」(仮の声聞=実は菩薩)、慰留すべき有情を「定種姓の菩薩」(真の菩薩) と見なすが、筆者としては同意しかねる。この点に関しては、上野 [2014] pp. 99-109 を参照。

(13) drṣṭādrṣṭārthayānataḥ (> drṣṭārthayāna-adrṣṭārthayānataḥ) の drṣṭārthayāna は、世親の注釈 (yo drṣṭasatyo mahāyānena niryāti) すでに〔四〕諦を見た者であり、大乘によって出離する者) に従って、「すでに真実を見て、行く者」と理解した (adrṣṭārthayāna もこれと同じ仕方理解する)。すなわち drṣṭārtha = drṣṭasatyā, yāna = (nir)iyāti と考えたわけである。この複合語は本来、drṣṭārtha-mahāyāna-yāna (すでに真実を見て、大乘によって行く者) とあったものが、複合語の真ん中の語が省略され (madhyama-pada-lopa)、現在のかたちになったものと思われる。その際、drṣṭārtha と mahāyānayāna は、それぞれ所有複合語であるが、同格限定複合語を形成し「並列」の関係にあると考える。かくして、真ん中の mahāyāna を省略すれば、drṣṭārthayāna という複合語が得られるわけである。

尚、drṣṭārthayāna に関しては、上野 [2014] p. 109 の注 47 で、藏漢の二訳や先行研究に倣って「yāna の ārtha を見た者」とするよりも「真理を見たことを乗とする者」と理解する方が、梵文の文法規則にかなっていると述べたばかりであるが、本稿を作成するにあたって、龍谷大学・桂紹隆教授よりご指導を賜り、以上のような理解を得るに到った。

また、未だ〔声聞の種姓に〕決定していない声聞は、二種であるとするべきである。(4a.1) すでに真実を見て、行く者 (dr̥ṣṭārthayāna)、すなわち、すでに〔四〕諦を見た者 (預流・一來・不還) であり、大乘によって出離する者と、(4a.2) 未だ真実を見ないで、行く者 (adr̥ṣṭārthayāna)、すなわち、未だ〔四〕諦を見ていない者 (凡夫・信解行地) であり、大乘によって出離する者である。また、すでに真実を見た者は、諸々の欲〔の対象〕 (欲界) から、(4a.1.1) 離貪した者 (vītarāga = 不還) と、(4a.1.2) 離貪していない者 (avītarāga = 預流・一來) と〔の二種〕である。〔このように〕二種より成ると説かれた真実を見た者、かれは鈍〔根〕であり、また理解の遅い者であるとするべきである。

tau ca labdhāryamārgasya bhaveṣu pariṇāmanāt /
acintyapariṇāmikyā upapattiyā samanvitau // XI.56 //

tau ca dr̥ṣṭārthau labdhasyāryamārgasya bhaveṣu pariṇāmanād acintyapariṇāmikyā upapattiyā samanvāgatau veditavyau / acintyo hi tasyāryamārgasya pariṇāma upapattau / tasmād acintyapariṇāmikī /

また、それら二種の者は、獲得した聖道を諸々の生存に回向するから、不可思議なる変易の生を身に具えた者である。

また、すでに真実を見たそれら二種の者は、〔諦を見ることによって〕獲得した聖道を諸々の生存に回向するから、不可思議なる変易の生を具えた者であるとするべきである。というのも〔輪廻に〕生じるために、かの聖道を回向することは思議の及ばざることだからである。それゆえ〔その生は〕不可思議の変易である。

praṇidhānavaśād eka upapattiṃ prapadyate /
eko 'nāgāmitāyogān nirmāṇaiḥ pratipadyate // XI.57 //

tayoṣ caikaḥ praṇidhānavaśād upapattiṃ gr̥hṇāti yatheṣṭam yo na vītarāgaḥ / eko 'nāgāmitāyogabalena nirmāṇaiḥ /

一類の者は、願力によって生を果たす。

〔他の〕一類の者は、不還性を具えているゆえに、諸々の化作〔身〕として〔生を〕果たす。

また〔すでに真実を見た〕それら二種の者の中、離貪していない一類の者 (預流・一來) は、願力により、思いのままに生をとる。〔離貪した他の〕一類の者 (不還) は、不還性に具わる力により、諸々の化作〔身〕として〔生をとる〕。

nirvāṇābhiratatvāc ca tau dhandhagatikau matau /
punah punaḥ svacittasya samudācārayogataḥ // XI.58 //

tau ca nirvāṅbhiratatvād ubhāv api dhandhagatikau matau, ciratareṅbhisambodhataḥ svasya śrāvakacittasya nirvitsahagatasyābhīkṣṇaṃ samudācārāt /

また、それら二種の者は、涅槃に愛着するゆえに、理解の遅い者であると考えられる。自己の心が、何度もくり返し起こることが〔身に〕付いているからである。

また〔すでに真実を見た〕それら二種の者は、涅槃に愛着するゆえに、両者ともに理解の遅い者であると考えられる。〔生を〕厭う想いに付きまとわれた声聞としての自己の心が、幾度となく起こることによって、現等覚するのに久しい時を要するからである。

so 'kṛtārtho hy abuddhe ca jāto dhyānārtham udyataḥ /
nirmānārthī tadāśritya parāṃ bodhim avāpnute // XI.59 //

yaḥ punar asāv avītarāgo dṛṣṭasatyāḥ so 'kṛtārthāḥ śaikso bhavan, buddharahite kāle jāto dhyānārtham udyato bhavati nirmānārthī / tac ca nirmāṇam āśritya krameṇa parāṃ bodhiṃ prāpnoti / tam avasthātrayasthaṃ saṃdhāyoktaṃ bhagavatā śrīmālāsūtre / śrāvako bhūtvā pratyekabuddho bhavati punaś ca buddha iti / agnidṛṣṭānte ca /⁽¹⁴⁾ yadā ca pūrvaṃ dṛṣṭasatyāvasthā yadā buddharahite kāle svayaṃ dhyānam utpādyā janmakāyaṃ tyaktvā nirmāṇakāyaṃ gṛhṇāti yadā ca parāṃ bodhiṃ prāpnotīti /

というのも、未だ目的を果たしていないかの者は、仏の在さぬ〔時代〕に生まれ、禪定のために努力し、化作を求め、それに依拠し、勝れた菩提を得るからである。

更に諦を見てはいるが⁽¹⁵⁾、離貪していないかの者、かれは、未だ目的を果たしていない者、有学の者であり、仏の在さぬ時代に生まれ、禪定のために努力し、化作を求める者となる。そして、その化作に依拠し、順次に勝れた菩提を獲得する。かの三つの位にある者を密意して、世尊は『勝鬘経』において「〔先ず〕声聞となり、〔次に〕独覚となる。そして更に仏〔となる〕」と説かれ、また火の譬えにおいて「かつて、諦を見る位にあった時、無仏の時代に〔生まれ〕、自ら禪定を起し、生身を捨て、化作身をとる時、そして勝れた菩提を獲得する時」と〔説かれたのである〕⁽¹⁶⁾。

MSABh 蔵訳テキスト

theg pa gcig pa nyid yongs su tshol ba la tshigs su bcad pa bdun te /

chos dang bdag ^(N182b1) med grol ba rnam //

⁽¹⁴⁾ *agnidṛṣṭānte ca* / M : *agnidṛṣṭāntena* Ns, B, L^{II}, N^I, F, N^N : *agnidṛṣṭāntema* Nc, A : *agnidṛṣṭānte ca* L^I.

⁽¹⁵⁾ 松本 [2013] pp. 328-329 は、「諦を見た者」(dṛṣṭasatyāḥ) を「諦を見ていない者」(adrṣṭasatyāḥ) に訂正すべきと主張するが、筆者は、その必要はないと考える。この点に関しては、上野 [2014] pp. 109-114 を参照。

⁽¹⁶⁾ 『勝鬘経』と「火の譬え」の関係について、本稿では、松本 [2013] p. 357 の注 17 に従って、両者の関係を“並置”と見なし、『勝鬘経』中に「火の譬え」が存するとは考えない。よって、ここには二つの文章が引用されていると見なすが、いずれも出典・所在を特定するには到っていない(長尾 [2009] p. 123 の注 5、及び松本 [2013] p. 357 の注 17 が指摘するように、現行の『勝鬘経』に当該の一文は認められない)。

mtshungs phyir rigs ni tha dad phyir //
 bsam gnyis thob phyir sprul pa'i phyir //
 (D174b6) mthar thug (C169b6) phyir na (P188a7) theg gcig nyid // (53)

nyan thos la sogs pa'i chos kyi dbyings tha mi dad pas na chos kyi dbyings mthungs pa'i phyir theg pa (N182b2) gcig pa nyid de / bgrod par bya bas na theg pa yin pas so // nyan thos la (P188a8) sogs pa'i gang zag rnams⁽¹⁷⁾ bdag med pa 'dra bas bdag med pa (D174b7)(C169b7) mtshungs pa'i phyir theg pa gcig pa nyid de / (P188b1) 'gro ba pos na theg pa yin pas so // rnam par grol ba mtshungs pa'i (N182b3) phyir theg pa gcig pa nyid de / 'gro bas na theg pa yin pas so // nyam thos la sogs pa'i rigs su ma nges pa rnams theg pa chen pos nges par 'gyur bas na rigs (D175a1)(C170a1) tha dad pa'i phyir theg pa gcig pa nyid de / 'dis 'gro bas na theg (P188b2) pa (N182b4) yin pas so // bsam pa gnyis thob pa'i phyir theg pa gcig pa nyid de / sangs rgyas rnams kyis sems can thams cad la bdag nyid kyi dgongs pa brnyes pa'i phyir dang / nyan thos de'i (D175a2)(P188b3) rigs⁽¹⁸⁾ (C170a2) su nges pa sngon byang chub kyi tshogs spyad pa rnams (N182b5) sangs rgyas kyi mthus de bzhin gshegs pas rjes su bzung ba'i khyad par phyogs tsam thob par bya ba'i phyir rgyud tha mi dad par mos pa'i sgo nas (P188b4) bdag nyid kyis sangs rgyas kyi dgongs pa thob pa'i phyir ro // de ltar na bsam pa (D175a3) gcig pa nyid (N182b6) thob pas (C170a3) sangs rgyas dang / nyan thos rnams gcig pa'i phyir theg pa gcig pa nyid do // sprul pa'i (P188b5) phyir theg pa gcig pa nyid de / ji skad du / nga ni lan brgya phrag du mar nyan thos kyi theg pas yongs su mya ngan las 'das so zhes gsungs (N182b7) pa lta bu ste / gdul bya⁽¹⁹⁾ (D175a4) rnams kyi don du de ltar ston pa'i phyir (C170a4) ro // (P188b6) mthar thug pa'i phyir yang theg pa gcig pa nyid de / gang phan chad bgrod par bya ba med pa de ni theg pa yin pas sangs rgyas nyid kho na theg pa gcig pa⁽²⁰⁾ yin no // de lta bas na (N183a1) mdo de dang de las ni dgongs⁽²¹⁾ pa de dang (P188b7) des theg pa gcig pa (D175a5) nyid du gsungs par rig par bya'i // (C170a5) theg pa gsum med pa ni ma yin no //

yang ci'i phyir sangs rgyas rnams kyis dgongs pa de dang des theg pa gcig pa nyid du bshad ce (N183a2) na /

kha cig (P188b8) dag⁽²²⁾ ni drang phyir dang //
 gzhan dag yang dag gzung ba'i phyir //
 rdzogs pa'i sangs rgyas (D175a6) rnams kyis ni //
 ma nges rnams la theg gcig (C170a6) bshad // (54)

kha cig drang ba'i phyir zhes bya ba ni nyan thos kyi rigs (P189a1) can ma nges pa gang dag yin pa'o // (N183a3) gzhan dag yang dag par bzung pa'i phyir zhes bya ba ni byang chub sems dpa'i rigs

(17) *gang zag rnams* C,D : om. *gang zag rnams* N,P.

(18) *rigs* : *ris* C,D,N,P.

(19) *bya* C,D : *ba* N,P.

(20) *pa* C,D : om. *pa* N,P.

(21) *dgongs* C,D : *dgos* N,P.

(22) *dag* C,D : *dang* N,P.

can ma nges pa gang dag yin pa'o //

nyan (D175a7) thos ma nges rnam gnyis te //
 theg (P189a2) don mthong dang (C170a7) ma mthong ba'o⁽²³⁾ //
 don mthong 'dod chags bral ba dang //
 'dod chags (N183a4) bral min 'di dman pa'o // (55)

nyan thos ma nges pa yang rnam pa gnyis su rig par bya ste / theg pa'i (C170b1) don mthong ba ni (P189a3) bden pa mthong ba theg pa chen (D175b1) pos nges par 'byung ba gang yin pa'o // theg pa'i don ma mthong ba ni bden pa ma⁽²⁴⁾ mthong ba theg pa (N183a5) chen pos⁽²⁵⁾ nges par 'byung ba gang yin pa'o // don mthong ba yang 'dod pa dag (P189a4) las 'dod chags dang bral ba dang / 'dod chags dang ma bral ba'o // don mthong ba rnam pa gnyis su bshad (D175b2) pa gang yin pa de⁽²⁶⁾ ni dman pa yin te / rtog (C170b2) pa bul ba yin (N183a6) par rig par bya'o //

de gnyis (P189a5) 'phags pa'i lam thob pa //
 srid pa dag tu bsgyur ba'i phyir //
 bsam gyis mi khyab bsgyur ba yi //
 skye ba dang ni yang dag ldan // (56)

don mthong ba de⁽²⁷⁾ gnyis ni 'phags pa'i lam thob pa srid pa (D175b3) dag tu (P189a6)(N183a7) bsgyur ba'i phyir // bsam (C170b3) gyis mi khyab par⁽²⁸⁾ bsgyur ba'i skye ba dang ldan par rig par bya'o // 'phags pa'i lam de skye bar bsgyur ba ni bsam gyis mi khyab ste / de lta bas na bsam gyis mi khyab par (P189a7) bsgyur ba yin no //

gcig ni smon lam dbang gis (N183b1) na //
 skye ba rab tu sgrub (D175b4) par byed //
 cig shos phyir mi 'ong ba (C170b4) dang //
 ldan phyir sprul pas rab tu sgrub // (57)

de gnyis la gcig ste 'dod chags dang ma bral (P189a8) ba gang yin pa de ni smon lam gyi dbang gis ji ltar 'dod pa bzhin du skye ba 'dzin to // (N183b2) cig shos ni phyir mi 'ong ba dang ldan pa'i stobs kyis sprul pa dag (D175b5) gis 'dzin to //

(23) *ba'o* N,P : *ba'i* C,D.

(24) *ma* C,D : om. *ma* N,P.

(25) *pos* C,D : *po* N,P.

(26) *de* C,D : 'di N,P.

(27) *de* C,D : *ni* N,P.

(28) *par* C,D : om. *par* N,P.

de gnyis yang dang (C170b5) yang du ni //
 (P189b1) rang sems kun tu 'byung ldan pas //
 mya ngan 'das la mngon dga'i phyir //
 rtogs pa bul ba yin par 'dod // (58)

de gnyi ga yang rang (N183b3) gi nyan thos kyi⁽²⁹⁾ sems skyo ba dang ldan pa yang dang yang du
 kun tu 'byung bas mya (P189b2) ngan las 'das pa (D175b6) la lhag par dga' ba'i phyir rtogs pa bul
 (C170b6) ba yin par 'dod de / yun ring mo zhig na mngon par rdzogs par 'tshang rgya ba'i phyir ro //

don byas ma yin (N183b4) de sangs rgyas //
 med par skyes nas sprul (P189b3) don gnyer //
 bsam gtan don brtson der brten nas //
 byang chub dam pa (D175b7) 'thob par 'gyur // (59)

bden pa mthong ba 'dod chags dang ma (C170b7) bral ba don ma byas pa slob pa gang yin pa de ni
 / sangs rgyas med pa'i dus su (P189b4)(N183b5) skyes nas sprul pa don du gnyer bas bsam gtan gyi
 don du brtson par 'gyur zhing sprul pa de la yang brten nas rim gyis byang chub dam (D176a1) pa
 thob⁽³⁰⁾ par 'gyur ro // bcom ldan 'das kysis gnas (C171a1) skabs gsum (P189b5) la gnas pa de la dgongs
 nas / (N183b6) dpal phreng gi mdo las me'i dpes nyan thos su gyur nas / rang sangs rgyas su 'gyur
 ro // physis ni sangs rgyas su yang 'gyur ro zhes gsungs te / (D176a2) gang gi tshe sngon (P189b6) bden
 pa mthong ba'i gnas skabs (C171a2) dang // gang gi tshe sangs rgyas med pa'i dus su bdag nyid kysis
 (N183b7) bsam gtan bskyed nas skye ba'i lus bor te / sprul pa'i lus 'dzin pa dang / gang gi tshe byang
 chub dam pa 'thob pa'i (P189b7) gnas skabs so //

MSAṬ 藏訳テキスト・和訳

XI.53

theg pa gcig pa nyid yongs su tshol ba la chos kyi dbyings mtshungs pa'i phyir dang / bdag med
 pa (C93b7) mtshungs pa'i (D93b7) phyir dang / rnam par grol ba mtshungs pa'i phyir (P104b2) ro //
 de la **chos kyi** (N102a4) **dbyings mtshungs pa'i phyir**⁽³¹⁾ zhes bya ba ni nyan thos la sogs pa'i chos
 kyi dbyings ni mtshungs te / nam mkha' bzhin no // nam mkha' la ni gang du yang mi mtshungs
 pa med pa ltar chos kyi (P104b3) dbyings kyang de dang (D94a1)(C94a1) 'dra'o // **bgrod par bya bas**
na theg pa yin pas so⁽³²⁾ (N102a5) zhes bya ba ji ltar na de⁽³³⁾ bgrod par bya ba yin zhe na / 'di
 ltar chos kyi dbyings la brten cing chos kyi dbyings⁽³⁴⁾ thob nas nyan thos la sogs pa la nyan thos

(29) *kyi* N,P : *kyis* C,D.

(30) *thob* C,D : '*thob* N,P.

(31) *dharmatulyatvād*.

(32) *yātavyaṃ yānam iti kṛtvā* /.

(33) *de* C,D : om. *de* N,P.

(34) *dbyings* C,D,S : om. *dbyings* N,P.

(P104b4) la sogs pa'i chos 'byung bar 'gyur bas so //

(D94a2) **bdag med pa** (C94a2) **'dra bas na**⁽³⁵⁾ zhes bya ba ni 'gro ba po'i gang zag (N102a6) nyan thos gang dag yin pa de dag kyang bdag med la / sangs rgyas bcom ldan 'das kyang bdag med do⁽³⁶⁾ // de'i (P104b5) phyir bdag med pa mtshungs pa nyid kyis gang zag la theg pa nye bar btags⁽³⁷⁾ pa'i phyir theg pa gcig pa nyid do //

(D94a3) **'gro bas ni** (C94a3) **theg pa**⁽³⁸⁾ **yin pas** (N102a7) **so**⁽³⁹⁾ zhes bya ba ni rnam par grol ba dang⁽⁴⁰⁾ rnam par grol ba la tha dad du bya ba med pas rnam par grol (P104b6) ba la theg pa nye bar btags⁽⁴¹⁾ pa'i phyir te / ngo bo nyid sgrub pas so //

rigs tha dad pa'i phyir theg pa gcig pa nyid⁽⁴²⁾ ces bya ba ni rigs nges pa tha dad pa'i phyir (D94a4) dang / (C94a4) ma nges (N102b1) pa'i rigs tha dad pa'i phyir te / ma nges pa'i rigs (P104b7) can gang dag yin pa de dag nyan thos kyi spyod pa spyad nas de nas dus phyis dge ba'i bshes gnyen sangs rgyas dang byang chub sems dpa' dang phrad pa'i sgo nas nyan thos kyi spyod pa bor te / theg pa chen pos nges (D94a5) par (C94a5) 'byung (P104b8) ngo // (N102b2) de bas na nyan thos kyi spyod pa spyad pa rnams theg pa chen pos nges par 'byung bas theg pa gcig pa nyid de / rigs la theg pa nye bar btags⁽⁴³⁾ pa'i phyir ro //

bsam pa gnyis thob pa'i phyir theg pa gcig pa (P105a1) **nyid de / sangs rgyas rnams kyis sems** (D94a6) **can thams cad la** (C94a6) **bdag nyid kyi dgongs pa brnyes pa'i phyir**⁽⁴⁴⁾ zhes bya ba ni byang chub sems (N102b3) dpas sa dang po thob pa'i dus na sems can rnams la bdag dang (P105a2) gzhan mnyam pa nyid kyi bsam pa thob pa gang yin pa de sangs rgyas pa'i⁽⁴⁵⁾ gnas skabs na shin tu rnam par dag par 'gyur te / (D94a7) bdag gang (C94a7) yin pa de nyid sems can rnams yin no snyam pa'i phyir ro // (N102b4) **nyan thos de'i rigs su** (P105a3) **nges pa sngon byang chub kyi tshogs bsags pa rnams**⁽⁴⁶⁾ zhes bya ba ni nyan thos kyi rigs can sngon byang chub sems dpa'i spyod pa spyad pa rnams te / nyan thos kyi rigs su nges pa'i phyir byang chub (D94b1)(C94b1) sems dpa'i spyod pa bor (P105a4) nas nyan thos nyid du nges (N102b5) par 'byung ba de dag la sangs rgyas bcom ldan 'das rnams kyis 'di dag ni sngon byang chub sems dpa'i spyod pa la spyad pa yin no zhes bya bar rnam par gzigs te / thob pa gang zhis sangs rgyas (P105a5) dang rgyud tha mi dad par mos pa (D94b2)(C94b2) nyid kyis 'thob par 'gyur bas⁽⁴⁷⁾ sangs (N102b6) rgyas kyi dgongs pa thob pa la sbyor bar mdzad do // **de bzhin gshegs pas rjes su bzung**⁽⁴⁸⁾ **ba'i khyad par phyogs tsam thob**

(35) *ātmābhāvatāsāmānyāt.*

(36) *do* C,D : *de* N,P.

(37) *btags* D : *brtags* C,N,P.

(38) *pa* MSABh,S : *pa ma* C,D,N,P.

(39) *yāti yānam iti kṛtvā /*.

(40) *rnam par grol ba dang* C,D : om. *rnam par grol ba dang* N,P,S.

(41) *btags* D,S : *btogs* C : *brtags* N,P.

(42) *gotrabhedād ekayānatā.*

(43) *btags* C,D : *brtags* P : illegible N.

(44) *dvyāśayāpter ekayānatā, buddhānām ca sarvasattveṣv ātmāśayaprāpteḥ.*

(45) *pa*'i C,D : *kyi* N,P.

(46) *śrāvakānām ca tadgotranīyatānām pūrvaṃ bodhisambhāracarītānām.*

(47) *bas* C,D : *ba* N,P.

(48) *pas rjes su bzung* MSABh : *pas rjes su gzung* C,D,S : *pa*'i *des bzung* N,P.

par bya ba'i phyir⁽⁴⁹⁾ zhes bya ba ni (P105a6) sangs rgyas kyi dgongs pa thob pa gang zhig rgyud
tha mi dad par mos pa'i sgo nas thob (D94b3) pa'i dgongs pa (C94b3) thob (N102b7) pa de phyogs tsam
zhig thob kyi dus gtan du thob pa ni ma yin no zhes bya ba'i tha tshig go // phyogs tsam thob
par (P105a7) bya ba'i phyir zhes bya ba ni de'i ched kyi bzhi pa yin te / sangs rgyas bcom ldan 'das
rnams sangs rgyas kyi dgongs pa thob pa 'dzin du 'dzud pa (N103a1) mdzad (D94b4) do / de (C94b4) bas
na sangs rgyas bcom ldan 'das de'i nyan thos rnams bsam (P105a8) pa gcig pa nyid rnyed pa'i phyir
theg pa gcig pa nyid do //

**mthar thug pa'i phyir yang theg pa gcig pa nyid de // gang phan chad bgrod par bya ba med
pa de ni theg (N103a2) pa yin pas sangs rgyas nyid kho na theg pa gcig pa⁽⁵⁰⁾ (D94b5)(C94b5) yin
no⁽⁵¹⁾ (P105b1) zhes bya ba ni dper na /**

sgra ngan rgya mtsho'i⁽⁵²⁾ klas pa can //
gzhu bdung mi ni ji snyed pa //
gzhu mchog can gyi gan na ni //
bud med yin par shes par gyis //

zhes bya ba lta bu ste / 'di skad du /

mi⁽⁵³⁾ pho ni de (N103a3) gcig (P105b2) kho nar zad kyi⁽⁵⁴⁾ de las rtsal che ba gzhan na med do
zhes smras pa (C94b6) yin (D94b6) no / de bzhin theg pa thams cad kyi mthar thug pa ni theg pa chen
po yin te / de'i pha⁽⁵⁵⁾ rol na theg pa khyad par can gzhan med pas theg pa (P105b3) gcig pa nyid do
//

一乗たること〔ないし乗は一つであること〕の探求については、(1) 法界が等しいことにより、
(2) 無我が等しいことにより、(3) 解脱が等しいこと〔など〕による。

その中、(1) 「**法界が等しいことにより**」というの、声聞などにとって法界は等しく、あたかも虚空のごとくである。虚空には、どこであっても等しくないことが決してないように、法界もそれと同様である。「**行かれるべき(対象)が(ここでいう)乗(の意味)であるゆえに**」というの、いかにして、それは行かれるべき〔対象〕であるのかといえば、すなわち法界に依拠し、法界を得た後に、声聞などに声聞などの法が生じることになるからである。

(2) 「**我が存在しないことは同様だからである**」というの、行く者である人 (gang zag, *pudgala) という声聞たち、かれらも無我であり、仏世尊も無我である。それゆえ無我であることが等しいことにより、「人」を「乗」と仮説 (nye bar btags, *upacāra) するので、一乗たることがある。

(49) *tathāgatānugrahaviśeṣapradeśalābhāya /*

(50) *pa* N,P : *om. pa* C,D.

(51) *pariyantād apy ekayānatā, yataḥ pareṇa yātavyaṃ nāsti tad yānam iti kṛtvā / buddhatvam ekayānam.,*

(52) *mtsho'i* : *mtshos* C,D,N,P.

C,D,N,P の支持は得られないが、*mtshos* を *mtsho'i* に訂正する。両者は発音が同じことにより、頻繁に混同されるからである。この点は高野山大学・加納和雄准教授よりご教授を得た。

(53) *mi* C,D : *om. mi* N,P.

(54) *kyi* C,D : *kyis* N,P.

(55) *pha* C,D : *phyi* N,P.

(3) 「行くことが（ここでいう）乗（の意味）であるゆえに」というのは、〔声聞の〕解脱と〔菩薩の〕解脱には区別がないことにより、「解脱」を「乗」と仮説するからである。〔解脱を乗と仮説し得るのは、yāna の語が〕行為の達成〔を意味する〕からである⁽⁵⁶⁾。

(4) 「種姓に別があることにより、一乗たることがある」というのは、すでに決定した種姓という別によって、及び、未だ決定していない種姓という別によって、である⁽⁵⁷⁾。未だ決定していない〔声聞の〕種姓をもつ〔声聞の〕者たち、かれらは声聞の行を行じ、その後には仏・菩薩という善知識と会うことにより、声聞の行を放棄し、大乘によって出離する。それゆえ声聞の行を行じてきた者たちが、大乘によって出離するので、一乗たることがある。「種姓」を「乗」と仮説するからである⁽⁵⁸⁾。

(5) 「二つの意樂を得ることにより、一乗たることがある。(5a) 諸仏はすべての有情に対してわれであるとの意樂を得るからである」というのは、菩薩は初地を得るときに、諸々の有情に対して、自らと他者は平等であるとの意樂を得るが、それは仏の位において極めて清浄になる。「われであるもの、それこそが諸々の有情である」と考えるからである。(5b) 「その種姓はすでに決定しているが、かつて菩提の資糧を集めた声聞たち」というのは、声聞の種姓をもち〔ながら〕、かつて菩薩行を行じた者たちである。声聞の種姓に決定しているため、菩薩行を放棄した後に、声聞性として出離するが、かれらを、諸仏世尊は「この者たちは、かつて菩薩行を行じたものである」とご覧になる。〔かれらが〕得たものは「〔われは〕仏と相続が異ならない」と信解することにより得ることになるから、〔かれらを〕仏であるとの意樂を得ることに結びつけなざるのである。「如来の勝れた摂取の一部だけでも得ようとして」というのは、仏であるとの意樂を得ることは、〔われは仏と〕相続が異ならないと信解することによって得られるが、〔その仏であるとの〕意樂を得ることは、一部だけを得るのであり、永久に得るのではない、という意味である。「一部だけでも得ようとして」というのは、その目的〔を示すため〕の〔第〕四〔格〕（与格）である。諸仏世尊は〔かれらに〕仏であるとの意樂を得させなざる。かくして、かの仏世尊の声聞たちは、まさに〔仏と〕同一の意樂を得るので、一乗たることがある。(7) 「究竟によってもまた一乗たることがある。それより、さらに行かれるべき（対象）はない、それが（ここでいう）乗（の意味）であるゆえに。仏たることこそが一乗なのである」というのは、たとえば、

俱盧〔州〕の海の〔ように〕広大な、あらんかぎりの弓引きは、最高の弓をもつ人の横では、婦人〔のごとく〕であると知るべし⁽⁵⁹⁾

⁽⁵⁶⁾ ngo bo nyid sgrub pas so (*bhāvasādhana) は、yānopacāra の理由と考えた。「仮説」という以上、本来の意味とは多少なりともズレるはずである。ここでいう bhāvasādhana は文法用語であり、bhāva は「行為」を意味する。yāna の語が「行くこと」自体よりも「行きついたこと」（行為の達成）を意味するから「解脱」を「乗」と仮説し得るのであろう。この点は加納氏よりご教授を得た。

⁽⁵⁷⁾ 『莊嚴經論』の III.6 (MSA p. 11, ll. 21-22) は、種姓の区別 (gotrabhedha) について、以下のように論じている。
niyatāniyataṃ gotram ahāryaṃ hāryam eva ca /
pratyaṃgotrabhedo 'yaṃ samāseṇa caturvidhaḥ // III.6 //
家系は決定せると不決定なるとがあり、種々の縁によっても退墮せざると退墮するとがある。家系の分類は略していえばこの四種である（長尾 [2007] p. 73）。
無性が言及する「すでに決定した種姓」と「未だ決定していない種姓」は、この中の前二者に相当する。

⁽⁵⁸⁾ °ana という yāna の接尾辞は、この場合、行く「手段」を意味する。乗が行く手段であるように種姓も人々を行かしめる手段であるから「種姓」を「乗」と仮説し得るのであろう。この点は加納氏よりご教授を得た。

⁽⁵⁹⁾ 出典不明。

といわれる通りである。〔また〕次のように、

男はかれ一人だけであるが、かれより、勇敢な者は他にいない⁽⁶⁰⁾

と〔も〕いわれる。同様に一切乗の究竟は大乘である。それより勝れた乗は他にないので、一乗たることがある。

XI.54

nyan thos kyi rigs (N102b4) **can ma nges pa gang dag yin pa'o**⁽⁶¹⁾ zhes bya ba ji ltar na nyan thos kyi rigs can⁽⁶²⁾ yin la ma nges (C94b7) pa yin zhes (D94b7) kyang bya zhe na / de dag ni nyan thos kho na ma yin pa'o⁽⁶³⁾ // 'o na ci zhe na / ma nges (P105b4) pa'i rigs can dag cig nyan thos kyi spyod pa la spyad pas na de'i phyir nyan thos kyi (N103a5) rigs can zhes bya ste / **byang chub sems dpa'i rigs can ma nges pa dag** la yang de bzhin du sbyar bar bya'o // yang (C95a1) ci'i phyir (D95a1) // sangs (P105b5) rgyas dang byang chub sems dpa' rnam kyis ma nges pa'i rigs can dag yal bar bor⁽⁶⁴⁾ / gang gis na nyan thos kyi spyod pa la (N103a3) rab tu sbyor gyi byang chub sems dpa'i spyod pa la ma yin zhe na / gnas skabs nges pa'i (P105b6) phyir btang snyoms su 'jog⁽⁶⁵⁾ go // (D95a2) gnas (C95a2) skabs der ma phyin par ma nges pa'i rigs can rnam byang chub sems dpa'i spyod pa la spyad par ni mi nus te / ji skad du 'phags pa ma khol (N103a7) gyi zhal snga nas kyis⁽⁶⁶⁾ /

'di ni (P105b7) gyang sa'i yul gyi mur ma phyin par nor can nyid mi 'gyur

zhes bya ba la sogs pa bshad pa lta bu yin no //

(4a)「声聞の種姓をもち(ながら)未だ決定していない者たちである」というのは、いかにして声聞の種姓をもつ者であり、かつ未だ決定していない者でもあるのかといえば、かれらは声聞そのものではなく、未だ決定していない種姓をもつ〔中の〕一部の者たちは、〔これまでに〕声聞の行を行じてきたことにより、それゆえ声聞の種姓をもつ者といわれる。(4b)「菩薩の種姓をもち(ながら)未だ決定していない者たち」に関しても、同様に適用すべきである。また、なにゆえに仏・菩薩たちは、未だ決定していない〔声聞の〕種姓をもつ〔声聞の〕者たちを捨て置かれるのか、どういうわけで声聞の行には結びつけるのに、菩薩の行には〔結びつけ〕ないのかといえば、すでに決定している位 (gnas skabs, *avasthā) のゆえに捨て置かれる (そのままにする) のである。そ (声聞) の位を経ることなしに、未だ決定していない〔声聞の〕種姓をもつ〔声聞の〕者たちが、菩薩行を行じることはできない。聖者 Ma khol (Mātr̥ceta⁽⁶⁷⁾) が、

これは、裂け目 (クレパス) の奥の部分に到らずしては、実に、富める者とはなれな

(60) 出典不明。

(61) *śrāvakaḥ* *anīyatāḥ* /.

(62) *can* N,P : *can yang* C,D.

(63) *ma yin pa'o* C,D : *yin no* N,P : *ma yin no(pa'o?)* S.

(64) *bor* N,P : *dor* C,D.

(65) 'jog C,D : 'ju N : 'jug P.

(66) *kyis* C,D : *kyi* N,P.

(67) Mātr̥ceta を Ma khol と蔵訳する例はターラナータの仏教史にも認められる。ちなみに寺本婉雅[1928/repr.1974] p. 147によれば、マートリチェータの名は、チベットにおいて、アシュヴァゴージャ (馬鳴) の別名と見なされていたという。

い (68)

などと説くとおりである。

XI.55

(D95a3) **nyan** (C95a3) **thos ma nges pa yang rnam pa gnyis te / theg pa'i don mthong ba dang theg pa'i don ma mthong ba'o**⁽⁶⁹⁾ (P105b8) zhes bya ba ni bden (N103b1) pa mthong ba dang bden pa ma mthong ba'o zhes bya ba'i don to //

「また、未だ〔声聞の種姓に〕決定していない声聞は二種であり、(4a.1) 乗の意味を見た者 (theg pa'i don mthong ba, *dr̥ṣṭārthayāna*) と (4a.2) 乗の意味を見ていない者 (theg pa'i don ma mthong ba, *adr̥ṣṭārthayāna*) とである⁽⁷⁰⁾」というのは、すでに〔四〕諦を見た者と、未だ〔四〕諦を見ていない者とである、という意味である。

XI.56

'phags pa'i lam de skye bar bsgyur ba ni bsam gwis mi khyab ste⁽⁷¹⁾ zhes bya ba ni / 'phags pa'i (D95a4) lam (C95a4) gyi skye ba la sdang ba yin na ji (P106a1) ltar na⁽⁷²⁾ skye bar sgyur bar byed ce na / de ni bden na de 'phags pa'i lam kho nas skye ba (N103b2) ni ma yin no // 'o na ci zhe na / nyon mongs pa lhag ma ma spangs pa rnams kyis te / sangs rgyas (P106a2) bcom ldan 'das rnams ni ma⁽⁷³⁾ nges pa'i rigs can gyi nyan thos⁽⁷⁴⁾ (D95a5)(C95a5) de dag la sangs rgyas nyid thob par bya ba'i phyir ci nas kyang lhag mthong lhur len cing thar pa la (N103b3) smon pa'i lam 'dor zhing 'khor ba la mngon du (P106a3) phyogs pa snying rje bsgom pa'i lam la sbyor ba de ltar 'doms la / snying rje'i dbang gis na 'phags pa'i lam srid pa la sdang ba de ci nas (C95a6) kyang srid (D95a6) pa la rgyab kyis phyogs te mi gnas pa dang mya ngan las 'das pa (P106a4)(N103b4) la gzhol bar mi 'gyur ba dang / sems can gyi don du yang dang yang du skye ba len⁽⁷⁵⁾ pa de ltar nges par byed de / de ltar na skye bar bsgyur ba yin no // de nyid kyi phyir skye ba de ni **bsam gwis mi khyab par bsgyur ba yin** (C95a7) **no** //

「〔輪廻に〕生じるために、かの聖道を回向することは、思議の及ばざることである」というのは、聖道が〔元来、輪廻に〕生じることを厭うものであるなら、いかにして〔それを輪廻に〕生じるために回向するのか。それはその通りであるが、〔輪廻には〕かの聖道のみから生じるのではなく、未だ断じていない残りの諸煩惱によ〔っても生じるのであ〕る。諸仏世尊は、未だ決定していない〔声聞の〕種姓をもつかれら声聞たち〔の中〕に、仏性 (sangs rgyas nyid, *buddhatva) を得ようとして、なんとしても観に専念し解脱を願う道を放棄し、輪廻に趣向し

(68) 出典不明。

(69) *śrāvako 'niyato dvedhā dr̥ṣṭādr̥ṣṭārthayānataḥ /*

(70) 藏訳の theg pa'i don mthong ba dang theg pa'i don ma mthong ba'o に従って「乗の意味を見た者と乗の意味を見ていない者とである」と訳したが、対応する梵語が *dr̥ṣṭādr̥ṣṭārthayānataḥ* であることには注意を要する。先の注 13 を参照。

(71) *acintyo hi tasyāryamārgasya pariṇāma upapattau /*

(72) *na C,D : om. na N,P.*

(73) *ma C,D,S : om. ma N,P.*

(74) *nyan thos C,D,S : nyon mongs pa N,P.*

(75) *len N,P : lon C,D.*

た悲を修習する道に結びつけるよう、そのように指導し、生存を厭うかの聖道は、〔元來〕生存に背反し住せざるものであるが、悲の力によって、なんとしても涅槃に入ることなく有情〔利益〕のために繰り返し生をとるよう、そのように確定させる。以上のようにして〔かの声聞たちは、輪廻に〕生じるために回向するのである。まさにそれゆえ、その生は「不可思議の変易である」。

XI.57

(P106a5) **gcig** (D95a7) **ste 'dod chags dang ma bral ba** (N103b5) **gang yin pa de ni smon lam gyi dbang gis**⁽⁷⁶⁾ **ji ltar 'dod pa bzhin du skye ba 'dzin to** //⁽⁷⁷⁾ zhes bya ba ni bsam gyis mi khyab pa'i skye ba yongs su 'dzin pa'i sgo nas yin gyi / las dang nyon (P106a6) mongs pa'i dbang gis⁽⁷⁸⁾ skye ba ni ma yin no // zhes bya ba'i tha tshig (C95b1) go // (D95b1) de ni (N103b6) 'dod chags dang ma⁽⁷⁹⁾ bral ba yin te / gang dang gang du sems can gyi don mthong ba de dang der skye bar smon lam 'debs so // 'dod pa las (P106a7) 'dod chags dang bral ba gang yin pa ni **phyir mi 'ong pa dang ldan pa'i stobs kyis** /⁽⁸⁰⁾ zhes bya ba ni bsam gtan gyi stobs kyis zhes bya (N103b7) ba'i (D95b2)(C95b2) don te // bsam gtan gyi stobs kyis⁽⁸¹⁾ sprul pa rnam sprul nas de dang⁽⁸²⁾ de dag tu skye ba (P106a8) kun du bstan pas sems can gyi don byed do //

「離貪していない一類の者は、願力により、思いのままに生をとる」というのは、不可思議〔なる変易〕の生をとるという点から〔いうの〕であるが、業と煩惱の力〔のみ〕によって生じるのではない、という意味である。かれは、(4a.1.2) 離貪していない者であり、どこであれ、有情の利益が見られるところに生じるように願を立てる。〔諸々の〕欲〔の対象〕（欲界）から (4a.1.1) 離貪した者は「不還性に具わる力により」というのは、禪定の力により、という意味である。禪定の力により、諸々の化作〔身〕を化作して、あちこちの場所に生を示現することにより、有情利益を為すのである。

XI.58

注釈なし

XI.59

bden pa mthong ba 'dod chags dang ma⁽⁸³⁾ **bral ba**⁽⁸⁴⁾ **don ma byas pa slob pa gang yin pa de**⁽⁸⁵⁾ zhes bya ba ni slob pa dang 'dod chags dang ma (N104a1) bral ba ste / (C95b3) 'dod (D95b3) pa na spyod pa'i lha tshe ring (P106b1) po rnam kyī nang du skye la / 'dir ni bstan pa nub par 'gyur ba

⁽⁷⁶⁾ *gis* C,D : om. *gis* N,P.

⁽⁷⁷⁾ *ekah prañidhānavaśād upapattim gṛhṇāti yatheṣṭam yo na vītārāgaḥ /*.

⁽⁷⁸⁾ *gis* C,D : *gi* N,P.

⁽⁷⁹⁾ *ma* N,P : om. *ma* C,D.

⁽⁸⁰⁾ *anāgāmitāyogabalena*.

⁽⁸¹⁾ *kyis* C,D,S : *kyi* N,P.

⁽⁸²⁾ *de dang* C,D,S : om. *de dang* N,P.

⁽⁸³⁾ *ma* C,D : om. *ma* N,P.

⁽⁸⁴⁾ *ba* MSABh : *ba'i* C,D,N,P.

⁽⁸⁵⁾ *yaḥ punar asāv avītārāgo dṛṣṭasatyah so 'kṛtārthah saikso bhavan,*.

dang de'i 'og tu shi 'phos nas sangs rgyas med pa'i dus su⁽⁸⁶⁾ skyes te bsam gtan gyi don du brtson par 'gyur ro // ci'i phyir bsam (N104a2) gtan gyi don du (P106b2) brtson zhe na / sprul pa'i⁽⁸⁷⁾ don du gnyer (C95b4) bas (D95b4) te / de ni sngon 'phags pa'i lam thob pa'i stobs kyis 'dod pa'i khams kyang rnam par sun 'byin par byed la de'i sems yul dag la yang mngon par mi dga'o // (P106b3) de nas sngon goms pa'i (N104a3) stobs kyis slob dpon med par 'phags pa'i lam mngon sum du byed cing (C95b5) bsam gtan (D95b5) dag skyed par byed do // de nas rdzu 'phrul gyi rkang pa bzhi bsgoms pas rang gi⁽⁸⁸⁾ lus yun ring por⁽⁸⁹⁾ (P106b4) gnas par bya ba'i phyir sprul par byed de / 'di ni de'i rang⁽⁹⁰⁾ (N104a4) sangs rgyas kyi gnas skabs yin no // tshogs yongs su rdzogs par bya ba'i phyir sprul pa gzhan dang gzhan dag (C95b6) kyang sprul (D95b6) te / de nas rim gyis (P106b5) shes bya'i sgrib pa spangs nas bla na med pa yang dag par rdzogs pa'i byang chub 'thob po // **me'i dpe**⁽⁹¹⁾ zhes bya ba (N104a5) ni dper na lci ba'i me las rtswa'i mer 'gyur la / rtswa'i me las shing gi mer 'gyur ba ltar zhes bya ba yin no // (P106b6) **gang gi tshe sngon bden pa mthong** (D95b7) **ba'i** (C95b7) **gnas skabs dang / gang gi tshe sangs rgyas med pa'i dus su bdag nyid kyis yongs su** (N104a6) **bsam gtan bskyed nas skye ba'i lus bor te**⁽⁹²⁾ zhes bya ba ni 'dis dus 'di srid cig thob po (P106b7) zhes bya ba ste / rdzu 'phrul gyi rkang pa bzhi bsgoms pas gnas skabs de bor nas sprul pa'i lus (D96a1)(C96a1) yongs su 'dzin te⁽⁹³⁾ / de'i 'og tu bla na med pa'i⁽⁹⁴⁾ (N104a7) byang chub 'thob po //

「諦を見てはいるが、離貪していないかの者は、未だ目的を果たしていない者、有学の者であり」というのは、有学にして離貪していない者である。欲界に属する諸々の長寿天の中に生じ、ここで説かれた〔教法が〕 廃れると、その後には死去し、仏の在さぬ時に生まれ、禪定のために努力する者となる。なにゆえ、禪定のために努力するのかといえば、化作を求めるからであり、かれは、かつて聖道を得た力により、欲界をも厭い、かれの心は〔欲界の〕 諸々の環境にも満足することはない。かくして、かつて〔聖道を〕 修習した力により、師なくして聖道を実現し、諸々の禪定を生ずることとなる。それから四神足を修習することにより、自らの身体を長期的に住せしめるために化作を為す。これが、かれの独覚の位である。資糧を満足するために、種々の化作〔身〕をも化作し、それから順次に、所知障を断じ、無上正等菩提を得るのである。「火の譬え」というのは、たとえば、牛糞の火から草の火となり、草の火から木の火となるようにである。「かつて、諦を見る位にあった時、無仏の時代に〔生まれ〕、自ら禪定を起こし、生身を捨て」というのは、この者は「〔わたしは〕 これだけの時間 (dus 'di srid cig) を得る」といい、四神足を修習することにより、〔生身を具えた〕 この位を放棄し、化作身を取り、その後には無上菩提を得るのである。

(86) *dus su* P : *du su* N : *yul du* C,D.

(87) *pa'i* C,D : *pa* N,P.

(88) *gi* C,D : *gis* N,P.

(89) *por* C,D : *po* N,P.

(90) *rang* C,D : *rang bzhin* N,P.

(91) *agnidṛṣṭānta*.

(92) *yadā ca pūrvaṃ dṛṣṭasatyāvasthā yadā buddharahite kāle svayaṃ dhyānam utpādyā janmakāyaṃ tyaktvā*.

(93) *te* C,D : *to* N,P.

(94) *pa'i* C,D : *pa* N,P.

SAVBh 和訳

XI.53

「一乗（たること、ないし乗は一つであること）の探究について、更に七偈がある」というのは、或る經典には乗は一つであると説かれ⁽⁹⁵⁾、三つではないと説かれている。〔しかしまた、別の〕或る經典には〔乗は〕三つであると説かれるのは⁽⁹⁶⁾、何を意趣しているのかといえば、〔仏の〕教説には二種の經典がある〔ことを意趣している〕。すなわち、未了義の經典と了義の經典である。その中、乗は一つであると説かれたのは、有情のために意趣をもって説かれたので未了義といわれるが、乗は三つであると説かれたのは了義である。三つの乗が存在するにもかかわらず、乗は一つであると説かれたのは、何を意趣して説かれたのか〔というその〕意趣を考察するために七偈を著す、という意味である。

「(1) 法と (2) 無我 (と) (3) 解脱 (と) (4) 種姓の別と (5) 二つの意樂を得ること (と) (6) 変化 (身) と (7) 究竟により、一乗たることがある」というのは、乗は一つであると説くことの意趣は、(1) 法が等しいことと、(2) 無我が等しいことと、(3) 解脱が等しいことと、(4) 種姓に別があり、乗が等しいことと、(5) 二つの意樂を得ることと、(6) 変化〔身〕のゆえにと、(7) 究竟のゆえに〔という〕七つの事柄 (don, *artha) を意趣して、乗は一つであると説かれたのである。

(1) 「法が等しいことにより、一乗（たること）がある（のは）、声聞などにとって、法界には区別がないからである」というのは、法が等しいことにより、乗は一つであると説かれたのである。いかにしてかといえば、声聞などの法界と、独覚などの法界と、如来の法界に区別は存在しない、あたかも虚空のごとくである。虚空において、いかなるものに〔も〕区別がないように、〔それと〕同様に声聞などの法界にも区別は存在しないのである。〔声聞・独覚・如来の三者が〕本質を同じくするゆえに、乗は一つであるというのである。なぜ、「法界」を「乗」というのかといえば、それゆえ「行かれるべき〔対象〕 (bgrod par bya ba, *yātavya) が（ここでいう）乗（の意味）であるゆえに」といわれる。ここに「法界」を「大乘」と設定する (gzhan pa) のは、「行かれるべき〔対象〕」、すなわち知られるべき対象である法界こそが乗であり、そのように法界に通達し、〔法界を〕証得するとき、声聞・独覚・如来の諸法が生じることになるから、法界を乗と設定するのである。

(2) 「無我が等しいことにより、一乗（たること）がある（のは）、声聞などと我が存在しないことは同様だからである」というのは、〔声聞・独覚・仏世尊の三者が〕無我において同様で

⁽⁹⁵⁾ 一乗説の典拠として、最も有名なものといえば、『法華経』を置いて他にない。『中観光明』は、その後主張（中観派の見解を論じる部分）において、一乗説の典拠として、『法華経』を始めとする九つの經典より、約二十の引用を行っている（松本 [1982a] pp. 291-277、ツルティム [1992] p. 882 を参照）。ちなみに、これらの引用が龍樹作と伝えられる『ストラ・サムッチャヤ』の記述に従っていることに関しては、ツルティム [1992] p. 882 を参照。

⁽⁹⁶⁾ 同様に、三乗説の典拠として、最も有名なものといえば、『解深密経』であろう（同経の三乗説に関しては、訳文と解説を含む袴谷 [1994] pp. 158-170 が詳しい）。『中観光明』は、その前主張（唯識派の見解を論じる部分）において、三乗説の典拠として、*Khams kyi tshogs kyi mdo*、『楞伽経』、『無尽意経』の名を挙げている（松本 [1982a] pp. 294-293 を参照）。ちなみに、第一の *Khams kyi tshogs kyi mdo* に関しては、袴谷 [1981]、及び山部「1987」が正面からこれを論じている。

あることが、乗は一つであると説かれたのである。いかにしてかといえ、声聞などは、行く者である人 (gang zag, *pudgala) が無我であるように、仏世尊〔も〕、行く者〔である人〕は無我である。〔声聞などであれ、仏世尊であれ〕行く者である人が無我である点は等しいから、そのことを意趣して乗は一つであると説かれた、という意味である。なぜ、「人」を「乗」というのかといえ、それゆえ「**かの行く者 ('gro ba po, *yātr) が (ここでいう) 乗 (の意味) であるゆえに**」といわれる。ここに「人」を「乗」と仮説する (btags pa, *upacāra) のは、〔人が〕解脱の主体 (gnas) であり、その人をして行かせる、すなわちそれにより到らしめるから、人を乗と仮説するのである。〔声聞などであれ、仏世尊であれ、〕すべての者にとって行く者たる人が無我である点は等しいから、乗は一つであるといわれた、という意味である。

(3)「**解脱が等しいことにより、一乗たることがある**」というのは、解脱が等しいことを意趣して乗は一つであると説かれたのである。なぜかといえ、声聞の解脱と、独覚の解脱と、仏の解脱は区別がないからである。諸經典には「〔声聞の〕解脱と〔菩薩の〕諸解脱とは別ものではない⁽⁹⁷⁾」と説かれている。なぜ、「解脱」を「乗」というのかといえ、それゆえ「**行くこと (bgrod pa, *yāti) が (ここでいう) 乗 (の意味) であるゆえに**」といわれる。乗の定義はまた、それによって行くところの原因 (rgyu) も乗というし、そこに向かって行くところの場所 (gnas) も乗というから、解脱という場所は、行かれるべき場所であり、獲得すべき法であるゆえに、それを乗というのである。

(4)「**種姓に別があることにより、一乗 (たること) があるのは、未だ決定していない声聞の種姓をもつ (声聞の) 者たちが大乘によって出離するからである**」というのは、種姓の異なる者たちが、〔大乘という〕同一の乗によって現等覚するから、〔現等覚への〕道が一つであることにより、乗は一つであると説かれたのである。すでに決定した菩薩の種姓をもつ者や、未だ決定していない菩薩の種姓をもつ〔菩薩の〕者たちが、大乘に入り、現等覚を得るように、未だ決定していない声聞の種姓をもつ〔声聞の〕者たちは、これまでは声聞の行を行ってきたが、仏・菩薩の善知識に会い、声聞の行を放棄し、大乘の法を行じ、現等覚するのである。大乘のみの道をもって覚るから、そのことを意趣して乗は一つであると説かれた、という意味である。なぜ、「種姓」を「乗」というのかといえ、それゆえ「**これによって (人々が) 行く (手段) ('dis bgrod pa, *yānti tena) が、 (ここでいう) 乗 (の意味) であるゆえに**」といわれる。この種姓が菩提へと発心せしめ、菩薩行を行じ、現等覚せしめるから、種姓を乗というのである。

(5)「**二つの意樂 (bsam pa) を得ることにより、一乗 (たること) がある**」というのは、二つの意樂 (bsam pa) を得ることにより、乗は一つであると説かれたのである。二つの意樂 (bsam pa) を得ることとは、(5a) 如来の意樂 (dgongs pa) を得ることと、(5b) 声聞の意樂 (bsam pa) を得ることである。(5a)「**〔諸〕 仏はすべての有情に対してわれであるとの意樂 (bsam pa) を得る**」というのは、つまり初地の段階で、菩薩は人・法の無我に通達することにより、自らと有情との両者が平等にほかならないとの意樂 (bsam pa) を得る。その平等性の意樂 (bsam pa) は、第二地から第十地までの間に修行することにより、仏地において浄化される。自らはまた他の有情でもあり、他の有情もまた自らであると、有情と自らは本質を同じくするものであるとの意樂 (dgongs pa) を得ることにより、乗は一つであると説かれた、という意味である。(5b)「**すでに声聞たちの種姓に決定している者たちで、かつて菩提の資糧を行じた者たち**

⁽⁹⁷⁾ 出典不明。

も、**仏であるとの意樂 (bsam pa) を生じる**」という中、「**その種姓に決定した声聞**」というのは、すでに決定した声聞の種姓をもつ者である。すでに決定した声聞の種姓をもつ者たちは、かつては菩薩行を行じていたが、声聞の種姓が決定しているから、〔かつての〕菩薩行を放棄し声聞乗に入り、声聞の涅槃を涅槃している。そういった者たちを、如来は、仏であるとの意樂 (dgongs pa) に結びつけなさるのである。そうすることにより、諸々の如来が「わたしは、かつて菩薩行を行じたから現等覚した」とお考えになるように、かれら声聞たちもまた「わたしたちは、かつて菩薩行を行じたから現等覚するであろう」という仏であるとの意樂 (bsam pa) を得ることになる。〔仏は〕そのことをも意趣 (dgongs nas) して、乗は一つであると説かれた、という意味である。どのような原因により、仏であるとの意樂 (bsam pa) を得るのかといえば、それゆえ「**仏の威神力のおかげで**」といわれる。仏であるとの意樂 (bsam pa) を得ることもまた、如来の加持〔力〕のおかげをもって得る、という意味である。いかにどの意樂 (bsam pa) を得るのかといえば、それゆえ「**如来による勝れた撰取の一部だけでも得ようとして**」といわれる。如来にある、如来と結びついた勝れた意樂 (dgongs pa) を、如来による勝れた撰取というのである。かの声聞たちが得た仏であるとの意樂 (bsam pa) はまた、一時的に得るのであるが、その意樂 (bsam pa) を永久にはもち得ないから一部のみを得るというのである。どのようなあり方で得ることにより、仏であるとの意樂 (bsam pa) を得るかといえば、それゆえ「**〔自らの身心の〕相続が〔諸仏と〕異なることにより、信解を得るから**」といわれる。菩薩行を行じた声聞と仏の両者において、「過去に菩薩行を行じたことにより〔自らもやがて〕現等覚するであろう」と考える、〔相互に〕異なることのない心の心相続を得るから、仏であるとの意樂 (bsam pa) の一部のみを得る、という意味である。「**このように〔部分的であっても〕同一の意樂 (bsam pa) を得ることにより、仏と声聞たちは、同一であるゆえに一乗〔たること〕がある**」というのは、上來述べてきたように、諸仏は有情と自らを等しく〔見なす〕意樂 (bsam pa) を得るし、声聞たちもまた、仏であるとの意樂 (dgongs pa) と等しい意樂 (bsam pa) を得るので、そのことを意趣して (dgongs nas)、乗は一つであると説かれた、という意味である。

(6)「**変化〔身〕により、一乗〔たること〕がある**というの、(諸經典に)「わたしは何百回にもわたり、声聞乗によって般涅槃した」と説かれているように、〔仏は〕所化の者たちのために、**そのように変化〔身〕を示現〔し、声聞乗によって般涅槃〕するからである**」というの、変化〔身〕によってもまた、乗は一つであると説かれたのである。いかにしてかといえば、諸々の声聞たちが自らの乗によって涅槃するように、そのように如来の変化〔身〕もまた、声聞乗に入り、般涅槃を示現するのであり、声聞と〔如来の〕変化〔身〕との両者が声聞乗により、涅槃することにおいて、〔両者の〕乗が同一であるから、乗は一つであると説かれた、という意味である。それゆえ、あれこれの經典にも「わたしは何百何千回にもわたり (lan brgya stong du mar)、声聞乗において般涅槃した」と説かれたのである。すなわち、如来そのものが声聞乗により般涅槃したのではなく、如来の変化〔身〕が声聞乗において涅槃を示現したのであり、教化されるべき有情のために変化〔身〕をもって涅槃を示現したのである。

(7)「**究竟により、一乗〔たること〕があるのは、〔それより〕さらに行かれるべき〔対象〕はないことについて、乗は一つであるゆえに、仏たることが一乗なのである**」というの、究竟により、乗は一つ(唯一)であると説かれたのである。「究竟」(mthar thug pa) と「最勝」

(mchog tu gyur pa) と「最高」(phul du phyin pa) とは同じ意味である。たとえば、世間においても、勇敢で賢明な最高の人々について「この人は唯一の者であり、〔これと並ぶ〕他の人はいない」といわれるように、〔仏果を得るための〕因法たる大乘こそ、〔声聞乗などの〕他の乗よりも勝れており、最高である、また果法たる仏に成ることこそ、仏〔果〕を得ることであり、最高である。仏を超えて、それより上に達すべき、獲得すべき勝れた〔果〕法は他に存在しないから、「仏たること」を「乗」と仮説するのである。最高 (mchog tu phyin pa) とは、それ一つに尽きるころの大乗が一つ (唯一) であると説かれた、という意味である。

「**以上のように、あれこれの經典に、あれこれの意趣をもって、一乗 (たることが説かれた) と知るべきである。(しかしながら、) 三乗が存在しないのでは決してない**」というの、上に説いた通り、乗は三つ存在するにもかかわらず、『楞伽經』⁽⁹⁸⁾ などのあれこれの經典の中では「乗は一つに尽きるのであって、三つとしては存在しない」と説かれたことによっても、一つの経言 (chos gcig⁽⁹⁹⁾) の中に、あれこれの意趣を意趣して乗は一つであると説かれたと知るべきである。〔すなわち〕了義において三乗が存在しないのでは決してない、という意味である。

XI.54

「**何のために、(あれこれの經典に、) あれこれの意趣をもって、乗は一つであることを (諸) 仏は説かれたのか**」というの、以上のように乗は三つ存在するが、七つのあれこれの意趣を意趣して、乗は一つであると説かれたことについて、〔その〕意味と意趣はいかなるものか、という意味である。「**或る者たちを誘引するために、また他の者たちを慰留するために、未だ決定していない者に対して、(諸) 仏は乗は一つであることを説かれたのである**」というの、未だ決定していない種姓をもつ者たちのために、意趣して、仏は乗は一つであると説かれたのである。「未だ決定していない種姓をもつ者」とは、声聞の種姓をもち〔ながら〕未だ決定していない者と、独覚の種姓をもち〔ながら〕未だ決定していない者と、菩薩の種姓をもち〔ながら〕未だ決定していない者である。〔その中、〕声聞・独覚の種姓をもち〔ながら〕未だ決定していない者たちは、〔最終的に〕大乘の行に入り、現等覚することによっても、乗は一つであると説かれたのである。〔一方、〕菩薩の種姓をもち〔ながら〕未だ決定していない者たちは、輪廻において〔自身を〕利するが〔他者に〕害を為す有情 (phan btags kyang gnod par byed pa'i sems can) と、〔自身は〕害されていないが〔他者に〕害を為す〔有情〕 (gnod par ma byas kyang gnod par byed pa) と、目的はないが〔他者に〕害を為す〔有情〕たち (dgos pa med par yang gnod par byed pa dag) を見、輪廻に恐れをいだく⁽¹⁰⁰⁾。〔かれらの中、〕声聞の涅槃に入らんと

⁽⁹⁸⁾ 一乗説の典拠として、『楞伽經』の名が示されている点に関して、松本 [2013] p. 298 は「スティラマティが、ここに敢えて『法華經』の名を出さず、『楞伽經』の名を挙げたのは、おそらくは、『楞伽經』に対する瑜伽行派の親近感、あるいは、『楞伽經』に“ālaya-vijñāna”「アーラヤ識」や“gotra”「種姓」という瑜伽行派の基本的教説が説かれているという事実が、理由となっているかもしれない」と論じている。ちなみに『楞伽經』は『中觀光明』の前主張 (唯識派の見解を論じる部分) において、三乗説の典拠として使用されているが、直後の後主張 (中觀派の見解を論じる部分) においては、一乗説の典拠としても使用されている (松本 [1982a] p. 293, p. 288 を参照)。尚、一乗・三乗、或いは、五姓各別の問題に関する『楞伽經』の立場については、高崎 [1979] p. 244, p. 353 が詳しい。

⁽⁹⁹⁾ chos gcig が何を意味するのか、よく分からないが、今は『楞伽經』などに説かれる「乗は一つに尽きるのであり、三つとしては存在しない」という「経説」を指すものと考えておきたい。

⁽¹⁰⁰⁾ 三種の「他者に害を為す有情」(gnod par byed pa'i sems can) を列挙する、この一文はよく理解できないが、類似の一節が『中觀光明』(D146a5-b1) に認められる (松本 [1982a] p. 294 を参照)。
gang gi phyir kha cig ni gcig (D146a6) tu gzhan la phan pa'i bsam pa la zhugs par snang ngo // gzhan dag ni rgyu

欲する者たちを声聞の涅槃に行かないようにして、〔大乘に〕慰留するために、乗は一つであると説かれた、という意味である。乗は一つであると説くことにより、いかにして〔或る者たちを大乘に〕誘引し、また〔他の者たちを大乘に〕慰留するのかといえば、「乗は一つのみである」と説かれる。すると、その両者は次のように考える。「最終的には大乘のみによって涅槃するのであるから、最初に声聞乗において行じ、後に大乘において行ずるという二つ〔の乗〕により、〔段階的に〕行じて何になるか。はじめから大乘に入るべきである」と考えて、大乘において最初から行ずるので、それゆえ〔一乗の意味を〕大乘一つと説くのである。(4a)「**声聞の種姓をもち〔ながら〕未だ決定していない者**」というのは、もし声聞の種姓をもち〔ながら〕、未だ決定していないとすれば、〔その者は〕いかにして〔声聞の種姓に〕決定するのかといえば、〔次のように〕答える。かれらは声聞そのものではないが、別のものにおいて種姓が決定しているわけではない。これまでに声聞の行を行じてきたことにより、声聞の種姓と言っているに過ぎない。(4b)「**菩薩の種姓をもち〔ながら〕未だ決定していない者**」のあり方も同じように見なすべきである。なにゆえ、かれら声聞の種姓をもち〔ながら〕未だ決定していない者たちに、最初から大乘の行を行ぜしめ、〔かれらを〕菩薩の行に置くことなく、仏・菩薩たちは、捨て置かれる（そのままにする）のかといえば、〔次のように〕答える。〔仏は、かれらが現に〕決定している位 (gnas skabs, *avasthā) を考慮して、捨て置かれたのであり、かれらは、先に声聞の行を行じることなく、大乘の行を立てることはできないから、それゆえ〔仏はかれらを〕捨て置かれたと見なすべきである⁽¹⁰¹⁾。

XI.55

上に、声聞の種姓をもち〔ながら〕未だ決定していない者たちを〔大乘に〕誘引するために乗は一つであると説かれたという議論によって、声聞の種姓をもち〔ながら〕未だ決定していない者が大乘に入ることを分類すれば、何種類になるかを示すために「**未だ〔声聞の種姓に〕決定していない声聞は二種であり、(4a.1) 乗の意味を見た者と (4a.2) 乗の見ていない者とである**⁽¹⁰²⁾」といわれる。声聞の種姓をもち〔ながら〕未だ決定していない者が、大乘の門に入り、

med pa kho nar pha rol po sdug bsngal ba kho nar mngon par dga'o // gzhan dag ni bdag la phan pa dang / bde ba chung ngu la yid chags shing gzhan la 'khu ba yin no // de bzhin du kha cig ni rang gi bde ba phun (D146a7) sum tshogs pa sgrub pa lhur len cing pha rol la gnod cing sdug bsngal ba las rnam par log pa yin no // la la ni 'khor ba'i bde ba tsam 'dod cing bsod nams dag byed do // de bzhin du gzhan dag ni srid pa'i bde ba 'dod pa las rnam par log cing bdag nyid rnam par thar par bya ba'i phyir (D146b1) brtson par byed do // gzhan dag ni pha rol po kho na grol bar bya bar sems shing rdzogs pa'i byang chub kyi go 'phang gi rgyu sbyin pa la sogs pa'i pha rol tu phyin pa dag la rab tu 'jug par dmigs so //

何となれば、ある人々は、もっぱら他人に利益を与えたいという意志において行動するものとして顕現する。他の人々は、全く理由がないのに、他人を苦しめることだけを好む。またある人々は、自己に利益を与えることと小さな業に執着し、他人を害する。またある人々は、自己の業の完成を成就することに専心し、他人を害し苦しめることを止める。ある人々は、輪廻の業だけを望み、徳行をなす。また他の人々は、〔輪廻的〕生存の業を望むことを止め、自ら解脱するために精進する。他の人々は、他人だけを解脱させたいと考えて、等覚という位の因である布施等の波羅蜜を行ずることが、把えられるのである (松本 [1982a] p. 294)。

ちなみに、松本 [1982a] は、上記の一段を「衆生の行動に区別のあることを実例を挙げて示す」ものと理解し (p. 277)、『莊嚴經論』III.2 との関連を指摘している (p. 267 の注 14)。

⁽¹⁰¹⁾ 「なにゆえ」以下の一段は、(4a)「**声聞の種姓をもち未だ決定していない者**」の中、「声聞の位に決定している者」と形容される、声聞乗を経た後でなければ、大乘に転入することができない者に対し、仏が「捨」の態度をもって臨まれることを論じているが、上述の一乗説をもってしても、全ての (4a) を大乘に誘引することはできないことを表しているようで興味ぶかい。

⁽¹⁰²⁾ 先の注 13, 70 を参照。

現等覚するのは二種である。〔すなわち〕乗の意味を見た者と、乗の意味を見ていない者とである。その中、乗とは四諦をいう。〔それゆえ〕四諦を見た者は、乗の意味を見た者であるという。それはまた、どのような者かといえば、預流・一來・不還の者である。乗の意味を見ていない者とは、四諦を見ていない者であり、凡夫・信解行〔地〕の者たちである。声聞〔の〕種姓をもち〔ながら〕未だ決定していない者であり、乗の意味を見た者を分類すれば、何種類になるのかを示すために「**〔その中、乗の〕意味を見た者は、(4a.1.1) 離貪した者と (4a.1.2) 離貪していない者とであり、両者は鈍〔根〕 (zhan) である**」といわれる。乗の意味を見た者にも二種がある。欲の貪を離れた者と、欲の貪を離れていない者とである。その中、「欲の貪を離れた者」とは、欲界の貪と見・修所断の煩惱を完全に断じたものであり、不還の聖者たちである。〔一方、〕「欲の貪を離れていない者」とは、欲界に属する見所断の煩惱は断じているが、修所断の諸煩惱は断じていない預流・一來の聖者たちである。〔欲界の〕貪を離れた者と離れていない者は、両者ともに「**鈍根**」(dbang po rtul po, *mṛdvindriya) であり、長い〔時間〕をかけて涅槃を得ることになるから「**〔理解の〕遅い者**」(zhan pa, *dandha) といわれる。「**大乘により出離する**」というのは、声聞〔の〕種姓をもち〔ながら〕未だ決定していない者であり、乗の意味を見た者と見ていない者との両者が、大乘の行を行じることにより、現等覚することを大乘において出離するというのである。

XI.56

〔乗の〕意味を見、大乘によって出離した声聞はまた、三界に生じ、有情利益を為すことから始めて、大乘において出離するゆえに、〔かれらが〕いかにして三界に生じるかを説くために「**それら二種の者は、(諦を見ることによって) 聖道を獲得し、(諸々の) 生存に回向するから、不可思議なる変易の生を具えた者である**」といわれる。諦の意味を見た者であり、貪を離れた者(不還)〔と〕貪を離れていない者(預流・一來)という、かの二種の者が、輪廻に生じることとはまた、「これまでに修習し通達し獲得した聖道が、輪廻に生じる因となりますように」と廻向し、輪廻に生じるから、かれらが、次々と輪廻に生じることを「不可思議なる変易の生を具える」というのである。〔或る者は〕いう。「聖道」が〔元來〕輪廻を厭い、輪廻に背反する見解(Ita ba)であるなら、聖道そのものが、いかにして輪廻に生じ、輪廻となるのか。〔答える。〕それはその通りである。聖道のみによって輪廻に生じるのではないが、欲〔界〕の貪を離れた不還の者たちにも、色〔界〕・無色界における未だ断じていない煩惱という残余が存在し、欲〔界〕の貪を離れていない預流・一來〔の者たち〕にも、欲界に属する修所断の未だ断じていない煩惱や、〔色・無色の〕二界に属する未だ断じていない煩惱があるから、それらの煩惱が、輪廻に生じるために、聖道を回向する力によって変化し、〔その〕煩惱が因となり、輪廻に生じることとなるのである。すなわち〔かれらは〕このように回向した通りに生じるのである。諸仏世尊は、声聞の種姓をもち〔ながら〕未だ決定していない者であり、欲〔界〕の貪を離れた者(不還)や〔欲界の貪を〕離れていない者(預流・一來)たちに対して、もっぱら觀を修習し、涅槃に随順する道を放棄するように促し、輪廻に趣向した大悲を修習する道へと結びつけるのである。そこで大悲の道を修習することによって、輪廻を厭い涅槃に趣向することによる觀の道を抑制し、輪廻に趣向し繰り返し輪廻〔に生〕をとることを「**〔諸々の) 生存に回向するから**」といわれたのである。以上のようにして、大悲の力によって輪廻に生じるゆえに、かれらの生は「**不可思議**」と規定される。「**不可思議とは(輪廻に) 生じるために、かの聖**

道を回向するから（不可思議というのである）」というのは、かの聖者たちの生を不可思議であるというのはまた、業と煩惱の力によって〔のみ〕生じるのではなく、聖道そのものが輪廻に生じる因となるとき、かれらの生は思議の及ばざるもの（不可思議）になるとの意味である。

XI.57

以上のように、欲〔界〕の貪を離れた者（不還）と離れていない者（預流・一來）の両者が、輪廻に生じることは、不可思議を特質とするといわれ、今、欲〔界〕の貪を離れていない者（預流・一來）が、有情を利益するために、いかにして輪廻に生じるかを説くために「**一類の者は願力により、生を果たす**」といわれる。「**一類の者**」という語は、欲〔界〕の貪を離れていない者であり、預流と一來をいう。かれらがいかにして輪廻に生じるかといえば、願の力によって生じるのである。すなわち、かれはまた、三界の有情が苦しむのを見て「どのような場所であれ有情を利益したいと、観じたままのところに生れますように」と願いを為し、〔その〕願の力によって、あちこちの場所に生じることとなる。〔そして〕生じた後、〔かれは〕有情に利益と安楽を与え、福德と智慧の資糧を集め〔自ら〕現等覚する、という意味である。〔次に〕欲〔界〕の貪を離れた者が、いかにして輪廻に生じるかを説くために「**他の一類の者（すなわち）不還は、瑜伽の化作により生じる**」といわれる。「**他の一類の者**」というのは、欲〔界〕の貪を離れた者（不還）をいう。かれらは自身が輪廻に生じることはないが、三昧を修習し、三昧の化作により〔化作身を〕化作するのである。〔その〕化作〔身〕が輪廻に生じ、有情利益を為し遂げ、福德と智慧の資糧を集め〔自ら〕現等覚する、という意味である。「**思いのままに生をとる**」というのは、業と煩惱によって〔のみ〕生じるのではなく、願の力によって生じる、という意味である。

XI.58

先〔の XI.55 とその注釈〕に「**欲〔界〕の貪を離れた者（と）離れていない者との両者は（いずれもまた）鈍〔根〕である**」といわれたことについて、その両者がいかに鈍〔根〕であるかを説くために「**涅槃に愛着するゆえに、それら二種の者は、理解の遅い者であると考えられる**」といわれる。〔乗の〕意味を見た人である、それら二種の者はまた、声聞の行により、輪廻を厭い、涅槃に趣向することに愛着するゆえに、智慧鈍くして、久しい時をかけて無上菩提を現等覚する、理解の遅い者である、という意味である。どのように涅槃に愛着するのかといえば、それゆえ「**何度もくり返し、自己の心に（声聞の心が）起こることが（身に）付いているからである**」といわれる。「**自己の心**」とは、汚れたもの（煩惱）であり、声聞の心である。「**何度もくり返し**」というのは、何度も何度も、という意味である。〔乗の〕意味を見たかれら声聞たちは、何度も何度も、汚れていて、輪廻を厭い、涅槃に愛着する声聞の心を、何度も何度も生じ、それ（声聞の心）を起こし結びつすが、有情利益を為さざるゆえに涅槃に愛着する者といわれる。かくして、初めに声聞乗についても説き、後に三阿僧祇劫において大乘に入り、現等覚することによって〔かれら声聞は〕久しい時をかけて現等覚するから鈍〔根〕といわれる。〔以上、〕(4a) 声聞〔の〕種姓をもち〔ながら〕未だ決定していない二種の者より、(4a.1)〔乗の〕意味を見た者と(4a.2)〔乗の〕意味を見ていない者との二種について説かれた。〔乗の〕意味を見た者にはまた二種があり、欲〔界〕の貪を(4a.1.1) 離れた者（不還）と(4a.1.2) 離れていない者（預流・一來）との二種を分けた後に、かれら二種の者が、輪廻に生じ、有情を利益

し、福德と智慧の資糧を集め、いかにして現等覚するかを説き終わった。

XI.59

さて、未だ決定していない種姓をもつ者とは、大乘の意味 (don, *artha) を見ていない者であり、かれがいかにして現等覚するかを説くために「**というのも、未だ目的を果たしてないかの者は、仏の在さぬ（時代）に生まれ、禪定のために努力し、化作（身）の化作を求め、それに依拠し、（勝れた）菩提を得るからである**」といわれる。すなわち、欲界の貪を離れることなく、諦も見ていない (bden pa yang ma mthong ba) ⁽¹⁰³⁾、声聞の種姓をもち〔ながら〕未だ決定していないかれらは「**未だ目的を果たしてない者**」であり、異生 (凡夫) または信解行地に住する者たちである。未だ目的を果たしてないかれらは、欲界より死去し、〔同じ〕欲界の長寿天の中に生まれる。こうして〔かれらは〕長寿天の中に住した後、いつであれ、世間に教主たる世尊と、かのお方 (教主) が説かれた諸々の教法が廃れ無くなってしまうと、再度、欲界へと生じることとなる。欲界に生じた後、〔今度は〕色界の禪定を得るために努力し邁進する。かれはまた、なにゆえ禪定に努めるのかといえば、化作〔身〕の化作を欲するゆえに禪定に努めるのである。かれは化作〔身〕を化作し、その化作〔身〕に依拠し、それ (化作身) を化作することによって、三界において有情利益を為し、福德と智慧の資糧を集め、ついに現等覚する、という意味である。「**かの者**」というのは、声聞の種姓をもち〔ながら〕未だ決定していない者にして、諦の意味を見ていない人 (gang zag, *pudgala) であるかの者、という意味である。「**有学の者となり**」というのは、異生 (凡夫) または信解行地において、如来の弟子 (声聞) となった後に死去し、欲界の長寿天の中に生じる、という意味である。「**仏の在さぬ時代に生まれ**」というのは、長寿天の中より、再度、欲界に如来の在さぬ時代に生まれ、という意味である。「**禪定のために努力し、化作を求め。〔そして〕それらの化作に依拠し、やがて勝れた菩提を得る**」ということについて。欲界に生じてからも、色界の禪定を得るために努力し邁進する。また、なにゆえ禪定に努めるのかといえば、化作を求めゆえに〔禪定に〕努めるのである。かれは禪定により、化作〔身〕を化作し、化作〔身〕として、種々の神通〔力〕により、欲界に生じるのである。その意味は、以下のごとくである。未だ目的を果たしていない、声聞〔の〕種姓をもち〔ながら〕未だ決定していない者たちは、長寿天の中より欲界に生れ〔変わ〕るとき、〔その〕環境に〔かれらの〕心が満足することはなく、以前に〔聖道を〕修習した力により、師なくして〔独り〕聖道を実現する。その後、禪定を完成し、禪定によって化作〔身〕を生じ、〔その〕化作〔身〕によって、福德と智慧の資糧を満足する。これが独覚の時 (位) である。その後、ついに、やがて無上菩提を獲得する。それが仏の時 (位) である。「**かの三つの位を密意して**」というのは、声聞の位と、独覚の位と、仏の位との三つ〔の位〕を密意して、という意味である。「**世尊は『勝鬘經』に由来する火の喩えをもって**」というのは、以上のように、かの三つの位を密意して、世尊はまた「はじめに火が牛糞に〔燃え〕広がり、次にそ〔の牛糞〕の近くにある乾草に〔燃え〕広がり、かくして国土に〔まで燃え〕広がる」という〔火の〕喩えをもって、声聞になってから独覚になり、独覚になってから仏になると説かれたのである ⁽¹⁰⁴⁾。かれはまた、欲〔界〕の貪を離れることなく、諦を見ることも

⁽¹⁰³⁾ 世親積や無性積が dr̥ṣṭasatya と表記するの対して、安慧積はこれを adr̥ṣṭasatya と表記する。この点に関しては、前注 15 を見よ。

⁽¹⁰⁴⁾ 安慧によれば、『勝鬘經』の中に「火の譬え」が存するかのごとくであるが、現行の『勝鬘經』に当該の一文は

ない者であり、欲界の長寿天の中に生じるまでに、声聞になるといわれる。次に長寿天より死去し、仏の在さぬ時代に生じるとき、禪定により化作〔身〕を成就し、福德と智慧の資糧を集積すれば、〔かれは〕独覚になるといわれる。かくして、ついに無上菩提を獲得すれば、〔かれは〕仏になるといわれる。「生身を捨て、化作身をとる」というのは、かれが、禪定の特質たる四神足を修習することも、「わたしの寿命がこれだけ〔の間、〕住しますように」と加持するのではなく、「わたしのこの禪定の力により、化作〔身〕が成就しますように」といい、化作〔身〕を成就させるから「化作身をとる」といわれるのである⁽¹⁰⁵⁾

見い出せない。尚、本稿が松本 [2013] p. 357 の注 17 に従って、両者の関係を並置と見なすことは、先の注 13 で述べた通りである。

⁽¹⁰⁵⁾ 以上の安慧釈は、XI.59 の文言を介して、凡夫・信解行地の者が、声聞となり、独覚となって、やがて仏となることを繰り返し論じたものであるが、内容の面で、以下に提示する『瑜伽論』『撰決択分』(Schmithausen [1969] pp. 58-62, T30, p. 749a5-b1) の一段とよく一致する(ツルティム [2000] pp. 21-22 を参照)。

II.1. nyan thos byang chub tu yongs su 'gyur ba / ci phung po'i lhag ma med pa'i mya ngan las 'das pa'i dbyings la gnas shing / bla na med pa yang dag par rdzogs pa'i byang chub mngon par sgrub par byed dam / 'on te phung po'i lhag ma dang bcas pa'i mya ngan las 'das pa'i dbyings la gnas shing byed ce na / smras pa / phung po'i lhag ma dang bcas pa'i mya ngan las 'das pa'i dbyings la gnas shing byed de / 'di ltar phung po'i lhag ma med pa'i mya ngan las 'das pa'i dbyings la gnas pa ni rtsom pa thams cad dang bral zhing 'bad pa thams cad rgyun bcas pa yin pa'i phyr ro //

2. gal te phung po'i lhag ma dang bcas pa'i mya ngan las 'das pa'i dbyings la gnas shing / bla na med pa yang dag par rdzogs pa'i byang chub mngon par sgrub par byed ce na / ji ltar skye ba gcig gis bla na med pa yang dag par rdzogs pa'i byang chub mngon par bsgrub tu rung ste / dgra bcom pa la ni re zhig skye ba gcig kyang med na / skye ba'i rgyun lta smos kyang ci dgos she na / smras pa / tshe'i 'du byed bsrings nas mngon par sgrub par byed do // bcom ldan 'das kyis kyang nyan thos byang chub tu yongs su 'gyur ba las shas cher dgongs nas / rigs kyi bu nor gyi rang bzhin can ni rdzu 'phrul gyi rkang pa bzhi bsgoms nas bskal pa'am / bskal pa las lhag par gnas par 'gyur ro zhes gsungs te / bskal pa las lhag par zhes bya ba ni 'dir bskal pa pas pha rol yin par dgongs so //

3. de ni de ltar tshe'i 'du byed bsrings su zin kyang bla na med pa yang dag par rdzogs pa'i byang chub tu shin tu bul ba yin te / mya ngan las 'das pa la mngon par dga' ba'i phyr te / byang chub sems dpa' las dang po pa yang de lta ma yin no //

4. de ni de ltar tshe'i 'du byed bsrings nas dbang po'i lus byin gyis rlob par byed cing / sprul pa'i lus kyis chos mthun pa pa dag la phung po'i lhag ma med pa'i mya ngan las 'das pa'i dbyings su yongs su mya ngan las 'da' ba ston par byed de / de na de dag 'di snyam du de ni phung po'i lhag ma med pa'i mya ngan las 'das pa'i dbyings su mya ngan las 'das so snyam du sems so // de dbang po'i lus byin gyis brlabs pa des 'dzam bu'i gling 'dir gar 'dod par ci nas kyang lha rnam kyis kyang mi mthong na / sems can phal pa gzhan dag gis lta smos kyang ci dgos pa de ltar rab tu dben par gnas par byed do //

5. de mya ngan las 'das pa la mngon par dga' ba de <la >lan mang du gnas pas / 'jig rten gyi kham rab 'byam de dang de dag tu de bzhin gshegs pa dang byang chub sems dpa' rnam la bsnyen bkur bya ba dang / byang chub kyis tshogs kyis lam bsgoms pa la bag med pa na / yang dang yang du sangs rgyas dang byang chub sems dpa' rnam kyis yang dag par skul bar mdzad de / yang dag par skul bar mdzad pa na yang / yang dang yang du bag yod pa la rnal 'byor du byed do //

問。迴向菩提聲聞、爲住無餘依涅槃界中、能發趣阿耨多羅三藐三菩提耶、爲住有餘依涅槃界耶。答。唯住有餘依涅槃界中可有此事。所以者何。以無餘依涅槃界中、遠離一切發起事業、一切功用皆悉止息。問。若唯住有餘依涅槃界中、能發趣阿耨多羅三藐三菩提者、云何但由一生、便能證得阿耨多羅三藐三菩提耶。所以者何。阿羅漢等尚當無有所餘一生、何況當有多生相續。答。由彼要當增諸壽行方能成?。世尊、多分、依此迴向菩提聲聞、密意說言、物類善男子、若有善修四神足已、能住一劫、或餘一劫。餘一劫者、此中意說過於一劫。彼雖如是增益壽行、能發趣阿耨多羅三藐三菩提、而所修行、極成遲鈍、樂涅槃故、不如初心始業菩薩。彼既如是增壽行已、留有根身、別作化身、同法者前方便示現、於無餘依般涅槃界、而般涅槃。由此因緣皆作是念、某名尊者、於無餘依般涅槃界已般涅槃。彼以所留有根實身、即於此界瞻部洲中、隨其所樂遠離而往、一切諸天尚不能觀、何況、其餘衆生能見。彼於涅槃多樂住故、於遍遊行彼彼世界、親近供養佛菩薩中、及於修習菩提資糧諸聖道中、若放逸時、諸佛菩薩、數數覺悟、被覺悟已、於所修行能不放逸。

(訓詁) 問ふ。菩提に迴向する聲聞は、無餘依涅槃界の中に住して、能く阿耨多羅三藐三菩提に發趣すと爲んや、有餘依涅槃界に住すと爲んや。答ふ。唯だ有餘依涅槃界の中に住して此の事有るべし。所以は何ん。無餘依涅槃界の中にては、一切の發起する事業を遠離し、一切の功用を皆な悉く止息するを以てなり。問ふ。若し唯だ有餘依涅槃界の中に住して、能く阿耨多羅三藐三菩提に發趣すといはば、云何が但だ一生のみに由り

Hayashima [1979] に対する訂正案一覧

(1) H48.7 bgrod pa nyid ⇒ bgrod par bya ba

C197a4, D196b4, N217b6, P217b3 も H と同じ読みを示すが、本稿は MSABh (D174b6, P188a7)、MSAT (D94a1, P104b3) の該当箇所 *nyid* に *yātavya* の訳語として *bgrod par bya ba* が用いられていること、及び SAVBh が直後に *bgrod par bya ba* の語を使用していることにより、*bgrod pa nyid* を *bgrod par bya ba* に訂正して読む。

(2) H48.9-10 chos kyī dbyings 'di theg pa yin te / 'di ltar ⇒ 削除

N217b7, P217b3-4 も H と同じ読みを示すが、本稿は C197a5, D196b5 に従ってこの一節を削除する。理由は以下の二つ。一つには、前後の文脈を考慮した上で必要ないと考えるから。二つには、この一節は直後に見える *chos kyī dbyings nyid theg pa yin te / 'di ltar* を誤ってくり返したものが、一語だけ変化したものと推測されるから。

(3) H49.8-9 bgrod par bya ba ⇒ 'gro ba po

C197a7, D196b7, N218a3-4, P217b7 も H と同じ読みを示すが、本稿は MSABh (D174b7, P188b1) の該当箇所 *nyid* に *yātr* の訳語として *'gro ba po* が用いられていること、及び SAVBh がこの後に *'gro ba po* の語を使用していることにより、*bgrod par bya ba* を *'gro ba po* に訂正して読む。

(4) H50.7 gcig pa ⇒ theg pa

C197b3, D197a3, N218a6, P218a2 も H と同じ読みを示すが、本稿は MSABh (D174b7, P188b1)、MSAT (D94a3, P104b5) の該当箇所 *nyid* に *yāna* の訳語として *theg pa* が用いられていることにより、*gcig pa* を *theg pa* に訂正して読む (松本 [2013] p. 358 の注 36 を参照)。

(5) H51.10 'dis ⇒ 'di

N218b4, P218a8 も H と同じ読みを示すが、本稿では C197b7, D197a7 に従って *rigs 'di ni* と読むことにする。

(6) H52.4 byang chub sems dpas ⇒ byang chub sems dpa'

て、便ち能く阿耨多羅三藐三菩提を證得するや。所以は何ん。阿羅漢等すら尚ほ當に所餘の一生有ると無かるべし、何に況んや當に多生相續すること有るべきや。答ふ。彼れ要ず當に諸の壽行を増して方に能く成ずるに由る。世尊、多分、此の菩提に迴向する聲聞に依りて、密意にて説いて言はく、「物類善男子は、若しは善く四神足を修し已はりて、能く一劫、或いは餘の一劫に住することあり」と。餘の一劫とは、此の中の意は一劫より過ぎたるを説きたまへり。彼れ是くの如く壽行を増益して、能く阿耨多羅三藐三菩提を發趣すと雖も、而も修行する所、極めて遲鈍を成じ、涅槃を樂しむが故に、初心始業の菩薩に如かず。彼れすでに是くの如く壽行を増し已はりて、有根身を留め、別に化身と作り、同法者の前に方便示現して、無餘依般涅槃界に於いて、而も般涅槃す。此の因縁に由りて皆な是の念を作さく、某の名の尊者は、無餘依般涅槃界に於いて已に般涅槃せりと。彼れ留むる所の有根の實身を以て、即ち此の界の瞻部洲の中に於いて、其の所樂に隨つて遠離して住するを、一切の諸天すら尚ほ觀ること能はず、何に況んや、其餘の衆生の能く見んや。彼れ涅槃において多く樂住するが故に、遍く彼の世界に遊行し、佛菩薩に親近し供養する中に於いて、及び菩提の資糧を修習する諸の聖道の中に於いて、若し放逸なる時は、諸佛菩薩、數數覺悟したまふ、覺悟を被り已はりて、修行する所に於いて能く放逸ならざるなり。

N218b6, P218b2 も H と同じ読みを示すが、本稿は C198a2, D197b2 に従って byang chub sems dpa' の読みを採用する。

(7) H53.2 nyan thos nyid ni ⇒ nyan thos kyi

N219a2, P218b5 も H と同じ読みを示すが、本稿は C198a4, D197b4-5 に従って nyan thos kyi の読みを採用する。

(8) H53.5 de dag de bzhin gshegs pa ⇒ de dag la de bzhin gshegs pas

N219a3, P218b6 も H と同じ読みを示すが、本稿は C198a5, D197b5-6 に従って de dag la de bzhin gshegs pas の読みを採用する。

(9) H54.15 spyod pa sangs rgyas ⇒ spyod pa dang sangs rgyas

H は C198b3, D198a3, N219b1, P219a4 の nyan thos dang byang chub sems dpa'i spyad pa spyod pa dang sangs rgyas gnyis より二つの dang を削除するが、本稿では、一つめの dang のみを削除し、二つめのそれは削除しない。

(10) H59.6 gnod pa byed pa ⇒ gnod par byed pa

C199b3, D199a3, N220b3, P220a6 も H と同じ読みを示すが、本稿は直前に見える二つの用例 (C199b2, D199a3, N220b3, P220a5-6 : phan btags kyang gnod par byed pa'i sems can dang、及び C199b2, D199a3, N220b3, P220a6 : gnod par ma byas kyang gnod par byed pa dang) に従って gnod pa byed pa を gnod par byed pa に訂正して読む。

(11) H61.7-8 mi ⇒ 削除

H は C200b3, D200a4, N221b5, P221b1 に支持を得ない mi を挿入し、'khor ba la mi zhe sdang ba ste と読むが、その意図がよく分からない。本稿では C,D,N,P の読みに従って H の mi を削除する。

(12) H61.15 phul nas ⇒ sprul nas

C200b6, D200a7, N222a1, P221b4 も H と同じ読みを示すが、本稿では phul を sprul に訂正して読む。蔵訳の古写本では、両者が混同されることが多々あるからである。

(13) H63.2 skye ba'i ⇒ skye'i

C201a7, D201a1 も H と同じ読みを示すが、本稿は P227a6 に従って skye'i の読みを採用する。ちなみに N222b4 は skyes の読みを示すが、これは採用しない。

(14) H63.19 'khor bas ⇒ 'khor ba la

C201b4, D201a5, N223a2, P222b4 も H と同じ読みを示すが、本稿では bas を ba la の誤写と見なし、前者を後者に訂正して読む。

(15) H64.12-13 'dug 'dug pa las / ⇒ 'dug pa las /

C202a3, D201b3, N223a7, P223a1 も H と同じ読みを示すが、本稿では'dug の重複を誤りと

見なしその一つを削除する。

(16) H65.8 gsung ⇒ sngon

C202b2, D202a3, N223b7, P223b1 も H と同じ読みを示すが、本稿は松本 [2013] p. 373 の注 141 に従って gsung を sngon に訂正する。根拠は同稿が指摘する MSAT (D95b4-5, P106b3) の de nas sngon goms pa'i stobs kyis slob dpon med par 'phags pa'i lam mngon sum du byed cing bsam gtan dag skyed par byed do // に求める。

(17) H65.9 bsam gtan gyi ⇒ bsam gtan gyis

C202b2, D202a3, N224a1, P223b2 も H と同じ読みを示すが、本稿は松本 [2013] p. 373 の注 142 に従って gyi を gyis に訂正する。根拠は H66.1, C202b6, D202a7, N224a5, P223b6 に見える bsam gtan gyis sprul pa の用例に求める。

XI.53-59 の梗概 (シノプシス)

XI.53 諸経典には種々の意趣をもって一乗性が説かれている。ただし、それは三乗の非存在を主張するものではない。

- (1) 法と (2) 無我と (3) 解脱が等しいことにより、乗は同一である。
- (4) 種姓に別があることにより、乗は同一である。
- (5) 二つの意欲を得ることにより、乗は同一である。
- (6) 変化身により、乗は同一ある。
- (7) 究竟により、乗は唯一である。

XI.54 三乗が存在するにもかかわらず、一乗性が説かれたのはなぜか。それは不定種姓の者を大乘に誘引し慰留するためである。

- (4a) 声聞の種姓をもち未だ決定していない者 (不定種姓の声聞) を大乘に誘引するため。
- (4b) 菩薩の種姓をもち未だ決定していない者 (不定種姓の菩薩) を大乘に慰留するため。

XI.55 不定種姓の声聞には二種があり、両者共に大乘によって出離することが可能である。「すでに真実を見て、行く者」とは「諦を見た者」であり、かつ「大乘によって出離する者」のことである。二種の中、前者には、更に二種があり、両者共に「鈍根」「理解の遅い者」である。

- (4a.1) すでに真実を見て、行く者 (= 諦を見た者: 預流・一來・不還)
- (4a.2) 未だ真実を見ないで、行く者 (= 諦を見ていない者: 凡夫・信解行地の者)
 - (4a.1.1) 欲界の貪を離れた者 (不還)
 - (4a.1.2) 欲界の貪を離れていない者 (預流・一來)

XI.56 真実を見たそれら二種の者 (預流・一來と不還) は、自身が獲得した聖道を輪廻のため

に回向することにより、不可思議変易の生を具えた者となる。

XI.57 一類の者（預流・一來）は願力により、他の一類の者（不還）は不還性に具わる力により、輪廻の世界に再生を果たす。

XI.58 これら二種の者は、輪廻を厭い涅槃に愛着する声聞としての心を幾度も起こすから「理解の遅い者」と称せられる。

XI.59 離貪することなく、諦を見た者（預流・一來）が、後に独覚となり、最終的に仏と成ることは『勝鬘經』が説く通りである。

* * *

『大乘莊嚴經論』第 XI 章第 53-59 偈（世親釈）の読解に際しては、龍谷大学非常勤講師・早島慧氏、及び同大学大学院博士課程・間中充氏とともに行った輪誦会にて、両氏より様々なご助言をいただいた。また当該箇所は無性釈・安慧釈を読解するにあたっては、高野山大学・加納和雄准教授よりご指導を得た。記してお礼申し上げます。有難うございました。

The *Mahāyānasūtrālaṃkāra*, chapter XI.53-59, Texts and Japanese Translation

Summary

This paper presents the texts and its Japanese translation of the *Mahāyānasūtrālaṃkāra* (=MSA), chapter XI.53-59. Chapter XI focusing on *Dharma-paryeṣṭi* (examination of the Dharma) consists of 78 verses in total, within that *ekayānatā-paryeṣṭi* (examination of the One Vehicle) appears in verses 53 to 59. Currently, in addition to Vasubandhu's commentary on the MSA, there are two further sub-commentaries available, those being Asvabhāva's *Mahāyānasūtrālaṃkāra-ṭīkā* (=MSAṬ) and Sthiramati's *Sūtrālaṃkāra-vṛtti-bhāṣya* (=SAVBh).

Below is a list of the current availability of the Sanskrit, Tibetan texts and Japanese translations concerning this part.

XI.53-59	Texts	Japanese translation
<i>MSABh</i> (Skt.)	Funahashi[2000], Nagao[2007], Matsumoto[2013]	Ui[1961], Matsumoto[1982b], Nagao[2007], Matsumoto[2013]
<i>MSABh</i> (Tib.)	—	—
<i>MSAṬ</i> (Tib.)	—	Shimokawabe[1986], Matsumoto[2013](an extract)
<i>SAVBh</i> (Tib.)	Hayashima[1979]	Matsumoto[2013](an extract)

This paper presents the Sanskrit and Tibetan Texts with a Japanese translation of the *MSABh*, the Tibetan text with a Japanese translation of the *MSAT*, with corrections from Hayashima's work [1979], and a Japanese translation of the *SAVBh*. Last I give a synopsis of chapter XI.53-59, based on the research above.

〈キーワード〉 大乘莊嚴經論、一乗、三乗、世親、無性、安慧